

川柳塔

昭和四十二年一月九日 第二種郵便物認可
昭和四十二年五月二十五日 印刷
昭和四十一年六月一日発行 (毎月一日発行)
(第九号)



No. 9

六月号

ご希望の方にかぎり 著中広告受付け

下の見本が一日200円の寸法です。
原稿締切は六月末着便まで。
活字指定等はおまかせください。

★あなたのこの消息を親友に知らせるため、本誌八月号に著中交歓広告をご希望の方に、かぎり受けつけることになりました。

姓名と雅号と住所ぐらいよわはいりませんが、二日分なら句がはいります。交歓広告にかぎり五分の一段が千円ですが、柳友が組んでお申込みになるとお安くなります。

川柳塔社
振替口座大阪
三三三六八番
おれわれの使命と思つております。
なとお申込みの数によつては、広告だけのページにまとめて、原稿到着順に上から組む予定です。

しかし重宝で申しますが決してふりにならぬようにしてください。でき得るかぎり、皆さんにご負担のからぬようにすることが、われわれの使命と思つております。

募集

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵通
近作柳樽 (10句) 菊沢小松園通
課題吟 (各題10句以内)

「ギター」 奥谷弘 朗通
「身許」 大坂形 水通
「洋」 白井三 林坊通

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。
文字は楷書で新かなづかいにしてください。

九月号発表 (7月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島生々庵通
近作柳樽 (10句) 松江梅 虫通
課題吟 (各題10句以内)

「優勢」 杉原愛 鳩通
「肩」 木村水 洞通
「星の間」 大鶴喜 由通

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳友をご使用ください。

GOLDEN
O.S.K

の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー



定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料)

一年分 千四百四十円 (送料)

昭和四十二年五月二十五日印刷

昭和四十二年六月一日発行

発行所 川柳塔社

電話大阪・二二二 九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

今月のことば

中島生々庵



◎先月号に続いて、私達のいのち 私達の生きる尊さというものを考えて見たい。

◎外界から脅威や苦難が迫って来た場合、人間の生き方に二つの型があつて、西欧の民族は外部の環境を変えようと努力し、アジア民族は自分自身を変えようとする苦心があるそのである。常安弘道氏は云う。「昨今の日本人には環境を変えるよりは自分を変えようとするだらしなががありはせぬか。そしていいかえれば長いものには巻かれるというヒクツ主義でもある」と諷していられる。

◎これは古来東洋思想として頭の中に消化されて来た明治生れの私達にとっては、考えさせられる言葉である。

◎ゆくりなくも「我を牛と呼べば之を牛とし

我を馬と呼べばこれを馬となす」の莊子の言葉を思い出す。人が何といましようとも何と諄しましようとも、牛だといわれて腹を立て、馬だといわれて喜ぶ等、およそナンセンス。自分はあくまで自分だとの莊子の信念である。

◎莊子のように偉い人の大自信に近づくことはなかなかの困難であるのが凡人の常である。しかし失意の時代であろうと得意の時代であろうと、それは一時の雲霧と観じ、誠実と逞しさとを心の灯として悠々歩を運びたいものである。

◎近頃「川柳塔」がホンの少し評判がいいからといって、浮き腰になるようでは大人とはいわれますまい。

川柳塔 六月号

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば……………中島生々庵……………(1)

★趣味と人生……………(20)

―同人特集― 福田丁路・野村岬月・松川杜的・藤原秋月・傍島静馬・不二田二三夫

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

近詠……………麻生葭乃……………(17)

武田信玄……………(川柳戦国志・二)……………富士野鞍馬……………(28)

秀句鑑賞……………(前月号から)……………後藤梅志……………(26)

川柳初篇研究……………(三十六)……………(18)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・

蘆溝暁月……………(大陸放浪)……………東野大八……………(30)

いのちある句……………戸田古方……………(42)



中島生々庵選

大阪市 正本水客

虚無僧は扇子で受けて何吹きましよう

左遷とは言わず見送り派手にする

見島市 本田恵二朗

かけ足で父のきげんのいい日なり

前へまわつてガムかんでる顔を見る

無理すんなすんなと半分真顔でい

花園妙心寺にて

風さやか法灯ゆらぐとも見えす

竜の眼へ和讃の声がのほりゆく

大阪市 山川阿茶

岸和田市 内藤きさ子

誰れに見しよとて古稀の薄化粧

妬く人もなく安らかな絹ぶとん

税金を返えして貰いもうけた気

同い年金は出来たが死なはつた

優勝戦敗けても土佐は胸を張り

借りにゆく涙とまらぬ花ぶぶき

内職に藤色があるたのしさよ

ゴロ寝ではよく眠つてる不眠症

八十の父と写して涙ぐみ

熊本県 有働芳仙

妻のヒス子供が旗を巻くと云う
別居してみたが愛情冷えるだけ
交替で上役の宅の草を抜き

瞳孔がひらき女の無抵抗

忙中閑などと虚勢の碁を囲み

高槻市 若柳潮花

まだ恋のしぐさにうとい藤娘

からまれる胡蝶へ獅子は毛振りする

嫁きもせず囲われもせず三味を抱き

難波の灯歩くつもりをさばかれて

正座した膝いたわつて立つ茶席

岡山市 服部十九平

鍵つ子へ童話作家が取材に来

声がわり日記へ符牒で何か書き

また窓を開けてこの人酔うている

画竜点睛アクセサリーに二カラット

形見分け無欲な叔父がパイプとり

大阪市 橘高薫風

蚊帳の隅は故郷よりも晦く遠し

初夏ビル街鏡の奥を往く如し

腕のない背広の袖はポケットに

消防車火よりも赤く胴ぶるい

緑衣脱ぎ捨ててもみどりなるは女

大阪市 後藤梅志

うどんそばなんだか遠い昔なり

馬鹿にするない鉄兜のオートバイ

入信の動機を語る目がつぶら

傑作はいい活字が立ち上がり

おもいきり開けてくじやく花の下

西宮市 若林草右

共稼ぎ旧姓のまままだ呼ばれ

結婚披露(四句)

またもとの私にかえる色直し

尻にしくコツもスピーチ伝授する

畳の間花嫁だけがかかる椅子

そとわからうちわにかえる角かくし

大阪市 中島小石

息子失ないし友

お悔みも言葉とならず手を握る

いたましき無言アルバムに見入る父

あきらめた筈にと涙にくれる母

亡母三回忌に(一句)

五月晴母逝きし日も晴れていた

四月のみかんしなびた味をかみしめる

大阪市 西 出 一 栄

飽きもせずへソくるだけの趣味に生き

活け花の根じめのように女生き

夫婦げんかの犬も喰わぬは若いうち

のび放題墓地のつくしは見逃され

祝入園おもちやではない腕時計

京都市 松 川 杜 的

醍醐寺の豊公行列を観る

豊公の遺徳幔幕に惚ぶ板

三芳院拝観（二句）

春らんまん亀島鶴島蓬萊山

山楽に伍して印象の画も並ぶ

オゾンどころか排気ガスのハイク道

手拍子が舞台をつなぐなごやかさ

兵庫県 大 江 秋 月

停年も近く土地だけ買うておく

天橋立へ旅して

名も知らぬ人へ帽子を振つてやり

十円で家中の無事拝んどき

家中を寄せて土産のひもを切る

旅行から帰った晩に雨となり

京都市 都 倉 求 女

春雨へついぜいたくに化粧品

トラツクのクラクションも春雨和らげる

珍客も子供にアトム見せられる

曇つてはいてもやつぱり伊豆の春

湯の底で朝日を体受けとめる

新居浜市 安 藤 桂 仙

散弾のように見合をして成らず

折伏が寄せては返す浪に似て

母米寿男ばかりで酔いつぶれ

一身上の変動

首の座へ来るものが来た日の淋し

老い恥をかきに出直す腹をきめ

大阪市 不 二 田 一 三 夫

四面を歌それを孤高と自賛して

うなずいて読めるのかいな書道展

つぶれないオモチヤに孫がカンをたて

安いもん食わさぬしつけやせてはる

BK芸能課・長島平洋氏結婚

張り扇（せん）を妻に持たせていいコンビ

京都市 大 鶴 喜 由

さもしさは今日を楽しむやからども

唇を突き出して娘に欲しいもの

しあわせを包み切れないあくる朝
春という気配が都おどりから

岡山県 浜田久米雄

そり返るつもりではない一等車

若輩に負けまい入れ歯よく洗い

満開の下で交通事故の処置

食堂車はビール野良では汗をふき

豊中市 戸田古方

坐席まで用意したのに乗りおくれ

捨て育ちそれそれなりのエチケツト

気位いがなじませないのもうれしうて

相性大吉凸凹認め合いながら

防府市 長野井蛙

いつ散るも悔なしさくら咲きはこり

同じテツ踏ませぬ意見を子が笑い

国宝になつて増家を粗末にし

音もなく中小企業は倒産し

守口市 村田瓢太

銅像の馬に雀が巣をつくり

二本目は身体に毒とめしにされ

その実はまんざらでない呑みつぶり

使いようで切れる鉄を持て余し

芦屋市 丸川初甫

ステツプも淡いランプの色に合い

辞書引いてしめた途端にもう忘れ

叱かれて出てゆくドアに引つかかり

平安朝の顔が自慢の流しびな

大阪市 福井野迷路

バスカルに思う

弱い輩弱いが然し考える

御臨終不幸にも金があり過ぎる

地球多事老年よ大志を抱け

嫌な人とは思えども微笑する

高槻市 傍島静馬

息拔きにハエ一びきを追いまわし

新開店割引やめたら喰べに来ず

児を抱いて席を譲れと云う如し

お詣りの帰りにのぞく二号邸

岡山県 田村藤波

煮えきらぬ雲が出足を鈍ぶらせる

祖国愛はるばる寄せた詠進歌

お見合でしたかと欠勤ひやかされ

人柄を読みとる応接間の飾り

竹原市 山内静水

ご自慢の新茶へ作法などいらす
ぜひ妻に読んでもほしい相談欄

恐くないげんこつ父ちゃん息をかけ
子の作文読んでも内に居てやれず

兵庫県 河原みのる

羊羹を切つたわたしの分はなく

一生を賭けた署名へつのかくし

見抜いたかイミテーションの方ならべ

云い訳をしているらしい障子影

笠岡市 木山遠二

使わないお金を蓄めて笑われる

値上したついでに豆腐小さくなり

せぬよりもまして内職続けとり

昼も夜もおんなじ節で耳が鳴り

大阪市 石倉旅風

見る人のところに任かす富士の雪

飛ぶ科学限界線で落ちはじめ

賞金が目当ての阿呆な踊りよう

口開けて笑わぬ人に金があり

倉敷市 野田素身郎

婿養子妻をなぐつた夢で覚め

隠やかな声で死刑を言い渡し

連休の妻のプランは大掃除
偽物と知らず相続税納め

ハワイ 羽佐間柳葉

着飾つて出る日は妻の標準語

社交家と言われる人の低姿勢

邪魔がられ目出たがられて喜寿米寿

人生の長短時間の使いよう

香川県 三井酔夢

佗しさよ良妻賢母甘えない

ヌードショウ妻の知らない目が光る

税務署はおとぼけうまい妻をやり

火だるまになればなれかし恋に賭け

善通寺市 岡田彰男

病む父へお医者になつて治したる

三カ月毎のレントゲン診断

妻や子 pensando 今宵も眠られず

苦勞する妻へ療養祈るだけ

鉄筋になった母校を見て

母校もう他人の顔で僕を見る

堺市 高崎雄声

汚れが目立つので白が大好き

汗かいてバタヤの犬が車ひく

和服姿少しうちわの方がよし
ご丁寧な呼唱と思えば実習生

出雲市 原 独 仙

祖母と猫桜咲く日を春炬燵

鶯が来て鳴く丘をブルトーザー

就職をする気で再婚すると決め

たわむれが過ぎ愛孫が泣き止まず

美禰市 安平次弘道

モーターのうなり赤字生むとは見えず

かみそりに似た神経で青白い

ずるずると深みへ女の大胆さ

善人の嘘喉仏へひつかかり

鳥取県 清水一保

鶯の美声ゆつくり山の道

保険屋の自信ゆつくり庭をほめ

選挙を終えて

公約の重さも意識する門出

メートル法になつても一升捨て切れず

大阪市 市場没食子

夢達成もうほら吹きと人云わす

孫にええ顔がしたさに出勤簿

割込んだ尻もじもと座を払げ

青森市 工藤甲吉
交通戦争犬も片足まきこまれ
物価高亭主は葱と比べられ

貧しさがそうさせている無表情

奈良県 麻生アート

女医はのか母性のムード漂わせ

旅先の骨董商と馬があい

無表情に判彫りながら受け答え

堺市 富岡淡舟

雨三日晴れりやタンポポ咲いていた

土砂降りの中を出るのも恋なるか

どうしても死なねばならぬ走り書

倉敷市 田垣方大

指三本出して電話で値切つとり

ゆさぶつてしがみつかせる貸ポート

俺だよと言えばなあんだと言う受話器

下関市 国弘半休

実兄の死に想う

白椿風も吹かぬに何故落ちた

外孫に負けて内孫叱つとき

垣一つ置いて隣は高級車

倉敷市 木村千容

百まで働こう会運動

百までは夢でも少し欲ばかりか

百までを夢に背伸びを一つする

老人クでしやばりさんについてゆき

門真市 福島鉄児

聞いていた程でなかった友の家

骨までも愛してすつからかんになり

座布団を外してからの一時間

岡山县 直原七面山

左遷地でゆつくり釣りを楽しむ気

タレントに一と月早いお正月

雨烈し と言うて逢わずにはおれず

大阪市 大坂形水

お隣りの計で温泉は中止する

交通マヒもう運ちやんも黙り込み

アンコールともかく僕も手を叩く

加賀市 野村味平

春の陽にうつらうつらと乗り越しぬ

病む妻の子供らしさも哀れなり

一生を棒に振る氣の見栄を張り

大阪市 本多柳志

一線は越さぬ妥協の手をにぎり

酔眼もうろうとして割勘間違わず

栄転も左遷も同じベルで発ち

大阪府 西 いわを

道化てはいても心から惚れて居り

演出は涙を出した処で幕

出来の悪い子を胎教のせいにする

下関市 桜川不水

弁当へ車窓豊かな春の旅

声色で酌ぐ女房は桜色

キヤリアでゆけばもう疾づくに課長級

大阪市 児島与呂志

二十年忘れず戦友の花だより

車掌の目意識している膝小僧

許可済みのキツスのなんと味気なし

大阪市 金井文秋

マニアだけ残しブームは去つていた

骨まで愛しとマゾヒズム

むきになる孫がかわいい いやがらせ

今治市 越智一水

欠点は親父にあつて嫁きおくれ

通信簿すなおに見せる子で嬉れし

人間が出来たと妥協主義をほめ

岡山县 横山一声

花の下だけは景氣のよいはなし

慰安旅行のつかれを出動してなおし

火災保険があるので放火とうたがわれ

倉吉市 奥谷弘朗

地下足袋で稼ぎパチンコ屋で取られ

飲むだけを稼ぐ阿呆に成つて老い

奥さんの衣裳見に行くお見送り

ホノルル 築山快夢起

贈り物二度の勤めとすぐわかり

ロスの旅雑詠

朝寒にニグロの吐きだす息白し

日本ブームえせ庭師でも飯が食え

岡山県 池田古心

御所拝観人の流れに何を見し

年金が貰えて嬉し飴を買い

愛されているよに女子を孕み

愛媛県 村上旭童

百姓は百姓同志花をほめ

ストマイでつんばになつて帰つてき

無免許でそこまで行ける腕をもち

岸和田市 植山武助

新入社員四十の俺がどう写る

体験を云えばのりけとひやかされ

子の家へ行く口実の欲しい母

加賀市 細呂木魯木

電気かみそりいかに多忙らしく見え

一応は用心してみて初の客

湯舟での無所作は噂 じつと聞き

宇部市 平田実男

取締るほうの落度はもみけされ

表面に出ないところが古狸

お歳暮がやつぱり効いていた異動

島根県 藤井明朗

合傘で団体が来る花の雨

公園の隅で子を待つ親同志

出世する肩書わが家に落ちつけず

岡山市 江国幽谷

ご主人の気持ちを探して庭を賞め

見苦しい社会が嫌で平社員

三ツ目の峠で山賊思い出し

大阪市 米虫一乃字

カーテンを替え六月の風を入れ

方言を土産話に真似るなり

倅せな人へ汚れぬ足袋のうら

大阪市 水谷竹莊

逢いに来てよと地図を書いてくれ

近いところでも送つておあげ式近し

はつたりと知らずに女惚れてくる

愛媛県 渡辺 曉 童

此の辺が甲羅に似せた倅か
皆さんがもろて下さる花を植え
此の先は欲も希望も四捨五入

奈良市 宮口 笛 生

罪な事裏で鶏しめられる
奥山にはぐれた鹿が野性めき
口軽い男が罪をつくりに来

岡山県 浜野 奇 童

子の期待裏切る出張命令書
膝の子を泣かせてしもうた大笑い
浮気してみたらと春風心地よし

呉市 林野 甦 光

実力の相違は頭下げるだけ
観光のお客へ海がやばに荒れ
隣へも教育ままの智慧を貸し

小松市 関戸 宗太 郎

宇宙までゆきたかろうにアドバラン
恩人をうるちよろさせて祝賀会
ためらわず秘書香典へ花輪そえ

神戸市 仲 どん たく

夜桜へ仏も酌まん墓地の春
売られ行く植木も春の花をつけ

宝石部高嶺の花が咲き揃い

竹原市 杉原 愛 鳩

逆光線女の線があからさま
パパは養子どの子もママに似る
もらい過ぎでした職人かえしに来

出雲市 中川 晃 男

裏がえり裏がえり雑巾すり切れる
箸枕だんだんはずす酒の膳
ズルズルと汚職の紐がたぐられる

出雲市 野村 岬 月

返事せぬ妻はテレビへ泣いており
中年の奥様マイペースで太り
なめられたらしいねずみが乱舞する

鳥取県 田中 蛙 眠 子

梅一輪一輪祖母は風邪マスク
給食の残滓学校の犬肥り
駢足で咲いて一夜で散りはじめ

高砂市 吉原 紅 月

ぎごちない言葉に誠意あふれとり
裏付けのない愛情へ振り向かず
折りたたみ傘で半分ずつぬれる

岡山県 大森 娛 句 楽

御所車祖母が教える柄模様

引算を知つてゐる百姓転業し

隠し芸ひとを盲らに悦に入り

宝塚市 小 畠 無 聖

孤独なる谷の落水何処へ行く

花の影踏んでトイレを待たされる

搔き分けるよう来た来た六十年

大阪市 天 正 千 梢

仏壇へ供えたサラリーでプランねり

三人の子の残飯で母ふとり

三児三様の意見あり母の幸

諫早市 大 崎 筆 染

白々と明けて寢床に入る夜警

派手な帯しめて母にもある若さ

朋友の寄せ書しのお喜寿の春

大阪府 高 津 徹 也

難題をあげせ男を確かめる

満足す老妻なりの情熱に

竿竹を一本増やす子が生まれ

伊丹市 小 川 静 観 堂

敬老会記念品だけ届けられ

わけもなく泣きたい夜かな まだ炬燵

転覆車だあれも居らず放つとかれ

三次市 和 泉 松 風

三次市にて

春霞み土手の桜が未だ続き

宴会の上座が似合う肥満型

落ちついた雲の流れの春の川

枚方市 宮 川 珠 笑

片言の兄を歩行器追つかける

あくびして寝物語をまだつづけ

二人目は育児日誌もなく育ち

芦屋市 唐 崎 専 翁

無責任時代を遁れたい隠居

老人会の仕事もひとつ殖えて来る

無精者追い立てられて一万歩

富田林市 岩 田 み よ

辛抱へ合槌打つて茶を出され

去りかねていつ迄愚痴る娘の墓石

陰口を聞いて帰つたしまい風呂

大阪市 中 川 滋 雀

横断をするにもスポンサー付きの旗

下戸だった故人をタネに酌み交し

落城を眺めたままの石の位置

新居浜市 小 林 孝 正

バーの灰皿までが出てくる旅靴

看護婦が女に見える程に癒え

心機一転身ぐるみ脱いで洗濯し

大阪市 河井庸佑

ささやかな抵抗ですと黙否権

孫の手がかゆいところをさけてかき

参観日つつかけで来て子がおこり

高槻市 山田季賛

腹立てて話す話が顔へ出る

原則を曲げて次の案考える

早寝した昔を妻が恋しがり

小松市 馬場魚山

日本列島人と車で渦を巻き

洗濯器置く場所もない家に住み

とりの声聴かせドラマの夜が明ける

岡山県 藤原秋月

メモをしたページがなかなか見出だせず

アカハタを読んだ知識を振り廻し

破門以後気ままに羽根が伸ばせまず

大阪市 今西章雅

嫁ぐ娘の家具六畳に待つその日

嫁ぐ娘の後一ト月をまだ勤め

親のない婿で気安い大阪弁

大阪市 室谷鉄舟

不渡りへ世間見る目が変つて来

暴落の痛手忘れて押目買い
血管を探る注射へ目をそむけ

豊中市 寺田花宵

スピッツの顔色読んでから出掛け

いささかの信心あつての寺まいり

春に咲く花をわが手で咲かせた気

布施市 渋谷三時

郵便切手張らぬ手紙の獵奇めき

メートル法知らぬ蛤ぐりはかり売り

外は雨テレビ満かいの花だより

大阪府 早川清生

六三三 本を消耗品とみる

いくさ知らぬヒロシマの子の聖讃歌

今治市 長野文庫

配置変えここにも一人癪な奴

神様もついでに拝まれて苦笑

平田市 久家代仕男

初孫と遠い昔の土筆摘む

年老いてからの旅程は悠張らず

加賀市 那谷光郎

餅黒う焦して年頃の物思い

鼻毛抜くオブザーバーが隅に居る

京都府 西村句楽坊

無抵抗主義と弁摩笑つてる

ペンズリ
コンクリート本堂で仏も血気なし

青森県 木村 涼人

居眠りをして連休がまだ続き

安定所遊んで居れと金をくれ

松江市 柳 楽鶴丸

就職結婚二段構えの女子大生

二十世紀を夢見て

混血児がふえて平和な世の中に

守口市 羽 原 静 歩

幕引きも少し飲んでるドサまわり

カンバスへ「清」に似たのがのぞきこみ

大阪市 川 口 弘 生

つかない日女房にまでくさされる

先方の都合考えて義理を欠き

玉野市 小 谷 仙 山

春斗へ軒の雀が首かしげ

坊の顔武者人形が良く似合い

大阪市 宮 尾 あ い き

家の空気よそこに机上の桜咲く

駅のポスター春を競うてよい景色

兵庫県 遠 山 可 住

公立も私立も駄目で見送られ

厄済んでアハハホホと笑いあい

岐阜県 大 谷 月 都

不気嫌は子からチャネル奪い取り

土筆摘む一日を妻ともち

加賀市 木 村 一 路

祖父の散歩石ころ数えているような

サングラスいつか離れて寄り付かず

新居浜市 近 藤 凡 生

責果し夕日へ安堵の背伸する

花吹雪踏には惜しい朝の庭

福岡県 太 田 湖 平

長命へ亡父の写真若々し

鯉幟総領息子出来たそな

鳥取県 渡 辺 乱 坊

原爆ドームみてから旅の雲哀し

聞いてから道理で垢抜けしてまん

— 目 選 —

西 尾 栞

右書左楽音痴の俺は如何せむ

まどろんで手形の夢とはあわれなり

木の芽あえ母すこやかに八十九

豆もろこ三日つづいた猪口を置き

孫見せに来る電話が妻の大ニュース

若本多久志

もめごともうまく捌いて古老なり

俗物でよしパチンコの醍醐味よ

日曜ぐらい寝かしといてと妻のぐち

これが人生だ酔うて寝る

洗濯と愛情だけで女生き

菊沢小松園

奈良にて

大仏を見下すところへ馳上り

物価高奈良の鹿さえ瘦せて見え

数珠つまぐり乍ら拝観料を考える

感心さす為に大仏の真下へ行き

文句など言わずに続く蟻の列

中島生々庵

雨の修善寺 雨だから修善寺の春らしく

雨の修善寺ガイドは無駄な気をつかい

無口同士峠ですする蕎麦の音

雨雲が切れてガイドのはずむ声

母の忌

もつたいない大悲無倦常照我

松江梅里

つべこべと返事に困るインタビュ

素振りにも見せぬ不満をほめてやり

ゴシップで叩かれタレントで酷使され

スリル追う山の神秘に触れて落ち

よそでへべれけ二次会に来て八百屋

清水白柳

鏡見つめて足音に振り向かず

妻の引力か酔いつぶれても帰る

幻想の女性天守の前に佇つ

イニシャルだけの男に裏切られ

そそくさと電話へ立てば箸が落ち

川村好郎

汚点には触れず惜んでいる弔詞

その顔で処女のはこりもあるもんか

出張からの電報銀行で待つており

会者常離けれど奇遇を喜ばん

割烹着の姿いちばん妻らしく

北川春巢

長女の結婚式にて

しあわせな家庭を父は疑わず

よい息子できて万才叫びたし

同 新婚旅行

上六は新婚旅行の荷に見えず

ハネムーンのコースを聞いて個性はめ

ハネムーン 一日ぐらい雨もよし

近 詠

麻 生 葭 乃

夕桜茶店へ雨を知らず風

夕桜帰りじたくの猪口を受け

霞む春大和にとがる山を見ず

峯の松われにならえと一列に

・次号予告・

路 郎 百 句

★

麻生葭乃女史抄出

長野県 高峰 柳 兎

熱湯ずき同志昼湯でなごみ合い

人間国宝くらしに触れているみじめ

墨をする心がはずむ堅い辞意

嫁の荷がいきなり村を春にする

停年が左遷のままでのかかり

大洲市 米 沢 暁 明

今日からは恩給 兵古帯草腹ばき

改札へボケツトどれもあわてたり

人並みに嫁入りしたこたしたばつてん

和歌山市 秋 月 宏 方

小企業やはり銀行さんと呼び

讃岐金刀比羅宮に詣ず

石段の高さご利益ありそうな

松山市 月 原 宵 明

満だ数えだ私の齢が判らない

上役に意見してから下り坂

予備校の案内不首尾祝うよう

川俣柳 初篇研究

(三十六)

前田喜代人 川端柳風
岡崎重義 故 高須啞三味
清 博美丸 十府
藤井和雄 岡田 甫

404 おれが面白くないよと守り帰り

五丸

藤井 何とでも想像できる句だ。何を不満でブイと帰ってきた守りだろうか。やはり色事に関係したこともしれないが、それ以上何と解すべきか私にはわからない。川端 子守りの中には安手な浮気をする者もあった。年頃の子守りがからかわれたりして、面白くないから実家へ帰ったとの意ではなからうか。

高須 実家へ帰ったのでなく、主家へ帰ってきたのではなからうか。子供を連れて遊びに行った先で、面白くないことがおこって、子供の心持ちと関係なく、さっさと帰る子守り。少女と女の間、妙に複雑なそんな心理が何気なく詠まれていて、面白と思う。

わが腹がへると子守りは帰るなり

(一七・20)

前田 この子守りまだお色気にとほしくいたずらされたのか、面白くないので主家に帰ったのであろう。「おれが」の「が」の響きが妙で、高須説の複雑な心理をよくうがったものであろう。

岡崎 お色気は関係なからう。赤ん坊を背負っての外出先で赤ん坊ばかりはお菓子などで機嫌をとってくれるが、子守りは忘れられているので面白くないからである。

丸 高須説の如く「面白くない」事柄を限定せず、漠然と面白くないことと見ています。

岡田 岡崎説に賛。その原因はなんであれ子供はもっと居たがるのに、子守りは自分が面白くないと主家へ戻る。

柳 放れ馬嫁ハこし屋へかけ上り 眠 狐
藤井 こし屋は奥屋で棺桶屋のこと。暴走する馬に追われてあわてた嫁は、処もあらうに近くの棺桶屋にかけ込んだというだけの句か。

川端 若い嫁の狼はいぶりがわかる。

高須 賛。三面子先生は「青年時代本郷でこの光景を見た。刑法第二十七条」と雑誌に書いているのは面白い。他人の家に飛び込むのは、刑法にふれるのであろうか？放れ馬理不尽に嫁かけ上がり (一六二) 丸 賛。

岡田 高須兄のために一言。法学博士岡田三面子先生のいう刑法二七条は雑誌の誤植なり、第一二七条が正し。同条は「往來危険罪ノ結果的加重」で「其業務ニ従事スル者、前項の罪ヲ犯シタルトキハ三年以

下の禁錮又ハ千円以下の罰金ニ処ス」即ち危険を避けたお嫁さんが罰せられるのでなく馬を暴走させた馬子が罰せられるのであります。

406 白やきねけいさんにおく御金印 門柳

藤井 御金印は純金の印刻。御金印を加工するのに使用する白やきねには、金の目盛りや、白やきねにも金が附着してしもう。従って材量と製品の間には、白やきねによる加工の為の減量を予めけいさんにおかねばならぬとの意か。以前は齒科医の加工室の置は、古いほど値がよく買って行き新しい置とかえてくれたという。

川端 賛。何の商売でも、原料や製品のロスは、計算にいれるものである。

岡崎 不詳。御金印に加工するのに、白やきねを使うだろうか？

清 「けいさん」は「計算」であろうか。とにかくわからぬ。

丸 「けいさんにおく」は「けさんとしておく」ので文鎮としてのせておく。ご金印だから幕府関係或いは將軍自身に関するとか。それにしても「白やきね」は何か。数年来氣にしておりながら未だ解せず。岡田先生の御教示を待つ。

岡田 「けいさん」は丸先生のいわれたよ

うに文鎮のこと、計算または圭算と書く。「けいさんにおく」の叙法からしても、文鎮として置く意味は動かせない。即ち將軍用の金印の製造を幕府から用命され大切な品でもあり、金高も大きいから紛失したりしては一大事、白などをかぶせておく。

407 朝かへり婦の長舌を聞いて居る 一甫

藤井 婦の長舌と漢文口調でちよつと氣取っただけの句。勿論この御亭主は度々のことでなれたもの、神妙に聞いているふりして右から左へ耳の中を吹き抜けさせている無抵抗主義が、最良の手段だと心得ているから。

高須 婦の長舌と女の長文句をむずかしく言ったところがこの句のヤマで、この女房少し学があるのであろう。落語のたらちねを思い出して、ちよつとおかしくなった。丸 賛。詩經大雅に「婦有長舌、維厲こゝろざわいへ階」とある。その文句取りであろう。

岡田 賛。

408 尼寺をおしへ雲叢百もらひ 車弓

藤井 これも鎌倉縁切寺の句。お目当ての尼寺を嫁に教えただけで百文もらい、こいつはありがていと相棒と醬油樽に腰かけて一杯ひっかけている。おそらくその女の

品定めを酒の肴にしていることだろう。川端 賛。ただし、駕代のほかに百文もらったのであろう。

高須 「尼寺を教え」だから、駕代の上にはなく、東慶寺付近の帰り駕か何かでマゴマゴオズオズしている嫁に「尼寺はあそこだよ」と教えて、百文の不労所得を得たという句であろう。

前田 嫁に教えたのでなく、追手に教えたともとれる。いずれにしても凡句。

丸・岡田 高須説賛。



★
花と人生

福田丁路

春、夏、秋、冬、朝に夕に、我が家の梅、桃、桜、椿、バラ等の花と挨拶を交すようになつて十数年、もの云わぬ花ではあるが、特に粧いをこらして、頬笑みをもってこれに応えてくれる。自分の心は一瞬寛きを覚える。そして毎日真近に、この自然の美と触れ合うことの出来るのを滲々と倅せに思う。今や自分とこれ等の花との繋りは切つても切れぬ仲である。

美しい花を見れば、誰れしもが持つ詩心に触れて、自分も作りたい気持ちになるものと見える。そしてその作り方について色々と聞かれる。好きな道としてその説明に熱がはいるところがその答えはきまったように、そんな面倒なことは自分には出来兼ねる、お宅は暇があるから……である。自分も勤めの身であり、家庭の用事もせねばならずで、相当に忙しい日々である。この中を僅かの暇を見つけて、趣味の花作りを楽しんでいる解で、

ここに大きな意義があるものと思つてゐる。併しこれには相当の苦勞がある。即ち土壌、日光、肥料、病虫害等の勉強が必要であり、それなくしては、折角の優良種苗も台なしである。

種蒔いただけでは生えぬものと知り

カタログのように咲いてはくれぬ花

如何に優秀な家庭に産れたからといって、その子供が必ずしも立派に育つものばかりでない。病弱なもの、心の狂つたもの等毛色の變つたものが出て、手を焼くことがある。花作りもこれと共通するところがあつて、その顕著な例は椿である。勉強通り忠実に実行しても枝変りといつて、絞り系統に赤花が、白系統に赤花が咲き、又種を蒔いた所謂実生に よるものは、昆虫等による花粉の媒介で、絶対といつてよい程に、形は同じでも色は親木とは反対の花が咲き、ガツカリさせられる。併し中には親木よりも立派なのが咲く掘出しものが出る。

肥料当り又は病虫害等の被害で、苦心して手に入れた銘花が、衰弱或は枯死することがある。これは自分の不始末の結果で、あきらめもつのが、数年かかつて奇麗な姿を見せてくれたものを、無惨に折り盗られることがある。それを発見した時の気持ち程みじなものはない。憂うつ極りなものである。

美しく咲いたが因果チョン切られ

何はともあれ花作りは楽しい。
四季夫々の花を咲かせて佗住居
これが兼々の念願であるが、色々の事情で
ここ当分叶えられそうになく残念である。

★
私といけばな

野村岬月

先生と呼ばれキヨロキヨロ落着かず

趣味の欄にいけばな、川柳と何時も本当の事を書くといふは、川柳は似合っているがもう一つは本当かいと思われらしい。私の持味がエレガントでない事充分承知しているがそれでも鏡で自分を確かめると万更他人の思いがわからぬ事もない。

私のいけばな入門の動機は一寸と變つてゐるらしい。終戦のドサクサに出来にもダンスのレッスン場が出来て五六人しか来ない頃に悪友とダンスを習い始めたが、何処で聞いたか両親が強く止めるので靴を風呂敷に包んで下駄はきで一年近くも続けていたが、とうとう職場の課長の耳に入り不良だときめつけられた。その晩悪友(これは両親が言っていた)

とへベレケに酔って文明がわからぬ奴等とはざいたり反省したりしたのも流石にこたえた証拠である。二、三日して悪友の誘いで百八十度転回、師匠の門を叩いた。これが私の池坊入門である。それから二十年全く不思議にも続いて周囲を驚かしているらしいが、私も不思議に思えるので仕方がない。悪友とはかり言って済まぬが彼も今は電報局の課長であるのだから私を良い方向へ誘った善行の賜であり、私は良友に恵まれたと思わねばならないし、また感謝している。彼は半年位で生花を断念したが今でも逢う度に「俺がおつたらお前は目立たぬ存在であつたらう、それで優秀な俺は他の道を選んだぞ、お前の為に」である。今暮をチヨボチヨボとやっているが六級どまり、でも相当強いと思っている。本当に良友ありてこそである。

私の師匠も家元から中国一の折紙をつけた程の腕であるが本場の芸術家らしい毎日世にいう変人であったのが気の多い私が続いている秘訣であったかも知れない。旧い人達もポツポツ途中で止めたので十年位前から私が最古参ということになっているが、三年前に息子さんの勤務の關係で大阪に移住され残念でたまらない。でもこの名人級の師の一門ということで当地方では注目されるのでウカウカ出来ない。若いお嬢さん達相手に週の二三、四日勤務終了後稽古を続けているが若

さ注入健康上、気分的に良い事だと思っている。言葉遣いや順序に、一寸と教育過程の違いから戸惑う事もあるが、内容は時代に関係なく科学の進歩と別な人心だと思つづく想う。かえって戦後の若者は違うと思ひ込んである父母以上の方に問題がありはしないだろうが、困った認識が妙に若い人達を遠くしている事だである。一例が床の花を横からはめたり、娘の生花を横から批判したりするの非礼をよく見かける。少々乱暴のようでも案外真剣にやっているの御安心されてもよいと思う。

私もオブジェなど随分発表しているがどうも一般の人から同人の方からもあれ花ですかと聞かれ一生懸命説明しているが共感と呼べないらしく「そうですかネー」とやられると何だか自信を失ってさびしい気がする。利休の「花は野にある如く」がだんだん重くのしかかって来る。野の花への感動を別な場所に持込む事のむずかしさであるが、これが何十年やってもつきない楽しさ苦しさであると思う。師匠の朝露を感じさせた山百合、春蘭の作品が今も忘れられないし、目標でもある。四月号本欄の

花の命ゆがめて華のお師匠さん 晃 男
は大多数の方々の共感であるうが、いけられた花が瞬時の美しい感動を呼んだなら、それは永遠に美しさとして残り花の命は異った永

さを保つであらう。投入壺の一輪、オブジェの中にある生きた花、どれも印象的で実際の野草の美しさを強調するなら、こんなむずかしさは大変な事であるが部屋へ飾ろうとする人心また短い命を惜しむ心、いろいろと心もあるが、私もお客様にも心に留まる美しい花を目指して、前掲句のようなお師匠さんにならぬよう、ともかく一生懸命努力している。想えば花もそれまで随分私や花屋さんに手折られて本当に可愛想である。

ゆらぐ胸花はしずかに笑うだけ
下手くそへ花は抵抗なくしおれ

尺八と人生

松川杜的

やろうと思つてやったのでなく、その当時社のデスクで隣りに坐っていた先輩が、一つ尺八でもやったらというようなことから、習い始めたのがきっかけで三十年間ただ続けてきたというだけです。今にして思えば長いようでもあり、短かったようでもある三十年でした。

尺八を口に当てて音らしきものが出たのが三日目、尺八らしい音色が出だしたのが三年

ぐらい経ってからかと記憶しています。首振り三年とは優等生のこと、私には首振り十年がやっとのことでした。五つの孔で二十二の音を出す至難さには全く泣かれました。

愛管をぶったことも語り草

然し誰がどうたいたいても同じ音の出る楽器とは違い、尺八というものは息の入れ方、口にあてる角度、指使い等によって十人十色の音色が出る。その個性に惚れたといえは惚れたわけ。ともかく吹き続けました。端座して吹く間は、無我の境、禪に通じる心境かとも思っています。

それでも師匠から次々と免状をいただき八年前に大師範の職格をいただきました。随分厄介をかけた宗家も師匠も、今は故人となりました。ただ免許状の横である日は怒り、ある日はにこやかに見守って下さっています。

免許状の横で恩師笑み給い

春はともかく、夏は蚊に攻められて、蚊帳の中、蚊という動物は実に音に敏感でブーンと振るわす翅の音程と尺八の人の音程が同律とかで仲間と間違えてやって来るらしい。秋は空気が頃合いに乾いて尺八屋には絶好のシーズン、月の冴えた夜等、下手な自分の音色に魅せられることもありました。冬は笛吹きには最悪の季節、冷たい空気に冷え切った竹を握っている間に手の感覚を失ったこともしばしばでした。

一管の歴史へ巡る春夏秋冬
今以って精神修養と健康増進のために拙ない唱譜扇を振り廻しながら後進の指導に努めております。

三十年の手垢が語る笛の色
雨音も入れて「雨の曲」テープする
初春の行事は笛で幕を切り

★ 米粒書きの 楽しさ

藤原秋月

昭和三十九年七月頃だったであろうか岡山市内のあるデパートで中国物産展が開催された。いろんな中華人民共和国の製品が展示され即売されていた。その中に毛筆があった。文字の本場と言われる中国の筆を一度、使ってみたいと思っていたので手ごろな値段の小さな筆を一本求めた。その頃から私は名刺を書くことを覚えた。いろんな筆を使ってみたが中国産の筆は書きよいように思う。大切に使用していたが惜しいことに先きを太くしてしまった。ところが去年また物産展が行なわれたので出かけて行って筆を買って来た。細い字

が書けるのでこの筆で名刺を書いたり知人の名刺を書いて贈ったりして楽しんだ。

商売ではなく趣味としてである。今年初めのある句会で「秋月さんは米粒に何字書けるか」と聞かれたので今まで、私は書いてみたことは無かったが試みに書いてみた。

筆は前記の中国産の筆である。いざ書く段になって迷った。どういう方法で書いたらよいだろうか。

指で米をおさえると指の下へ隠れてしまう。針でおさえるといふ力が入りすぎて飛んで行ってしまう。いろいろとやってみた揚げく、紙へ米粒がどうにか覗くだけの穴を開けて紙の下へ米粒をおさえて書いた。初めは自分の雅号しか書けなかったが書いていく内に字数も増えて行き川柳と雅号を書いたり「君が代」の全文を書いたり等々。

書くのに虫眼鏡を使えば楽に書けるだろうが米粒を敷いた紙をおさえていると虫眼鏡は持つことができない。人に持ってもらえばよいが誰も面倒がって持ってはくれない。目と米粒の間は二センチ程の近さで書く。一粒書き終えるのに字数の関係で多少、異なるが十分ぐらいは、かかるだろう。

書き終えてから虫眼鏡を覗いてみてうまく書けているとホッと安堵する。何分肉眼で見ても書くのだから太くならたり細くならたりで専門家が書いたように細く美しくは書けな

い。でも手間を入れて書いたものであるから私には愛着がある。

また、ジッと机に向っているときは無我の境地とでも言おうか、何もかも全てを忘れ何とも言えぬものである。米粒に字を書く人は大勢おり都会で警察署へ勤務している私の叔父も以前、米粒に「南無妙法蓮華經」と「君が代」の全文を書いたもの二粒を書いて来てくれた。叔父も小さいときから書道が好きで今も暇を見つけては書を楽しんでいるそうである。私が米粒に書いたのと書道家の書いたのを比較すると私のは随分と太くてきたなくとても見られたものではない。だが私は米粒書きの専門でもなく書道家でもない。

榮転も左遷もなくて畑をうつ

一介の貧農である。自分の小さな楽しみとして書くのであるから下手でも下手なりに結構楽しい。米粒に書いたものを家においていると遊びに来た人が珍らしかってくれといって持って行く。書き初めてから今までに何粒ぐらい書いたのだろうか。大分、保有米粒が減った(?)ように思う。

今だからよいが終戦後の食糧難時代であつたら、こんなことは出来なかったかも知れない。今年は趣味の米粒書きの分も含めて増産に励まねばならないと思っている。只今は昭和三十七年川柳を始めたときからの私の作品(入選句)を米に一粒ずつ書き始めている。

米粒による句集(?)である。だが筆も先きが太分、太くなって来たのでどこまで続くかわからない。

もともと体の丈夫でない私は数年前から胃を患いまた慢性中耳炎の手術後もまだ判然とせず養生の日々を送っている。病気が長びくと、とかく気持ちが沈滞するがそんな私を慰めてくれるのが川柳であり、米粒書きである潰瘍のない牛の胃をけるなり

(四十一、四、九記)

日 日 好 日

★

傍 島 静 馬

わたくしの趣味は仕事と大きく出

いまは亡き恩師路郎先生の句評に曰く、仕事は仕事、趣味は趣味とハッキリ区別している人がいる。それが趣味やら仕事やらハッキリしない人もいる。仕事はしているのか、していないのか判らぬが、趣味なら、暮から釣から踊と何んでも来いの人もいる。

ところが、政治家や実業家で、何一つ趣味を持たない人がいる。こんな人に、「あなたのご趣味は？」と訊いたところが、「わたし趣味は仕事ですよ」と大きく出たというのである。と、この句は松下幸之助氏の、ある日の新聞談話を見て出来たものであるが、松下さんのように、大実業家が言えば素直に受け入れられるが、中途半端な人間が言えば大へんキザに聞えるのである。若いころから自分は、謡曲、水彩画、写真、釣、古銭、切手、類の蒐集、そのほか趣味といえるかどうか、玉突、麻雀に到るまで凡そ人のやるようなことは一応手がけてみた。しかしそのいずれもが中途半端の尻切れトンボで、一として物にしたものはなく、徒らに歳月を過して来た。

こんな状態の中で、ときたま「あなたの趣味は？」などと聞かれて咄嗟に、「わたしの趣味は仕事です」と、逃げてはいたが、内心では、自分の無趣味を大へん淋しく感じていた。かかるうち、昭和二十八年二月、俳人であり川柳の先輩でもある、里田一十さんに誘われ川柳の道にはいったが、これが趣味らしい趣味としていちばん長く続いている。「川柳雑誌」から引続き「川柳塔」の今日に到るまで、毎月の本社句会に無欠席という記録を保持しているが、この川柳だけは生涯の好伴侶として、今後益々愛し続けることだろう。川維のモットー「生命ある句」は未だ思う

ように出来ないが、移り気な性分から、フト俳画に興味を覚え、一、二年のつもりで入門したが、早いものでこの四月で六年目を迎えた。川柳は頭によって考えるものであり、俳画は手で描くものである。川柳の奥義を究めるには、生涯をかけてもまだ足りないが、俳画の上手下手は一見して判るので、描く者にとっては張合いがあるように思う。

下手だとも云えず個性が出ています

毎年同門の俳画展には、新旧を問わず殆んど全員が出品することになっているので、自分も一点は必ず出しているが、一つの画を描き上げるまでに、二十枚、三十枚と描き直しても、なお気に入ったものが出来ないときがある。しまいに根負けして中の一枚を表装するのだが、下手な画でも表装すると聊か見栄えがするから不思議だ。厚かましく知人へ案内状を出すと、みんな見て下さっていて、その色彩、または筆力の良さなど、その都度お賞めの言葉や、激励の書面を頂いて嬉しいやら恥しいやら、甚だ複雑な気持ちにさせられるのである。

思わざり俺の俳画を所望され

毎年俳画展出品後の軸を、ことも達に遺品のつもりで、長男から順に遺っているが、自分のこともだから遺れるものであって、到底人様に上げられるようなものではなく、また上げるつもりなど大それた考えは毛頭なかつた。

ところが展覧会を見て来たさる知人から是非一枚描いてくれと頼まれたのには弱った。断つても、断つても、会う度毎に催促され、しまいに、表装はこちらですするからとたつての頼みに、遂に断り切れなくなり、不承不承、やや自信あるものを一点差上げたが、後日、茶掛けにされてご夫婦で喜んでおられる様子を聞いて、大へん恐縮した次第である。

さる人の臨終に「財布、財布」と、つぶやいたと聞かされたことがあるが、この人は死の間際まで金に執着を持っていたらしいが、生きるために金の必要さは判るが、人生は金が総てではないと思う。この人に何か深く傾倒した趣味があったなら、恐らくこんな言葉を吐かなかつただろうと思うと、何んだか気の毒な気がしてならない。

この点自分は川柳と俳画のおかげで、心にとりと生活に潤いが出来たことを喜んでいく。人前では大きな声も出さず、滅多に怒ったこともなく、将来のお人好しに頼りないのが、更に人間が円くなったように思う。それも、これも、川柳に俳画という恰好な趣味を持つたおかげだと思う。幸いにも健康に恵まれているので、今後益々この道に精進して、大いに余生をエンジョイするつもりである。

よそ目には日日好日の楽隠居

(昭和41年4月21日)

漫才台本

不二田 一三夫

パチンコ、マージャン、競輪など、現代人の遊びを一回もやったことがない。だがきらいかといえばそうではない。いたって勝負ごとは大好きなのだが、ばく自身でこわいのばく、ばくの凝り性である。トコトンまで打ちこんでしまうわるいクセがある。少年のころ映画が好きだった。撮影所から映画誌の編集へと、たとえ三日でもそれでメシが食えるところまで暴走してしまうのである。

標語作りのときもそうだった、ついには家業の本職をすててしまった。とにかく自分ながらヤツカイな人間だと思っている。

いまは漫才の台本を勉強しているが、雑誌の仕事があるので時間的には苦しい。それでも大せいの人の笑いごえが電波に乗ってくるとうれしいものである。世の中の人にたのしく笑ってもらい、しかもイクバツかの原稿料がはいのだから、こんなありがたい趣味はないと思っている。

ババの作ラジオの前へかしこまり

路郎賞受賞句・川柳塔創刊 一周年記念に発表

川柳塔社常任理事会

第四回川柳塔社常任理事会が五月四日日本社樓上で開かれた。

「路郎賞」を路郎忌に発表の予定であったが路郎賞を意義あるものにするためには、句会吟からだけでは權威がないという声が出た。かつての路郎賞は句会出席奨励のためのものであった。

ここで路郎賞を大きく発展させ、その受賞の対象は同人作品、すなわち「川柳塔」の雑誌から優秀一句をとることになった。これには雑誌選考者である北川春果、西尾榮、菊沢小松園、川村好郎、松江梅里、若本多久志諸

氏に清水白柳氏が加わり、七選考委員厳選の上生々庵主幹が決定することになった。
(路郎賞参加作品は川柳塔創刊十月号から本年九月号までに発表された同人作品)

七選考委員が何篇かの候補作を持ちより、ここに川柳塔を代表する優秀句が発表されるわけだが、この栄光の第一回路郎賞を獲得する人はだれか？この企画は柳界に大きな話題を投げることになるであろう。

菊沢小松園氏、九月号から「初步教室」を担当

清水白柳氏が「作句教室」を担当され、今日の隆盛をみたが、氏のあまりにも多忙すぎる柳務に、これ以上つづけるには氏の健康がゆるまず、ここに菊沢小松園氏にバトンをとっていただくことになった。

小松園氏は「川雉」時代にも初心者指導に当たられた経験を生かし「作句教室」を「初步教室」にあため、九月号から本誌を飾っていたのだが、みなさんとともに大きい期待をもって九月号を待ちたい。

大会 役員

第一部「一周年祭典」清水白柳、川村好郎、戸田古方、吉田圭井堂、傍島静馬、八木摩太郎、西いわを、阿部柳太諸氏。

第二部「川柳大会」若本多久志、西尾榮、菊沢小松園、市場没食子、菊田いさむ

正本水客、河相すむ、橘高薫風、児島与呂志、西田柳宏子、金井文秋、本多清人、河井庸佑、浅川八郎、高橋操子、山川阿茶、西出一栄諸氏。

第三部「野外パーティ」松江梅里、大坂形水、小川恒明、水谷竹荘、本多柳志辻白溪子諸氏。

大会の写真は樋口舟遊氏、記事は不二田一三夫氏。

兼題は六月二十日締切

兼題は6月20日日本社着便まで受けつけることになっている。おまちがいのないように。

会場でいただくのは席題だけで、この点、重ねてご注意のほどを。兼題、席題ともに各二句以内。

野外パーティ

美しい庭園での野外パーティはきつとご満足を得ることと思う。ご予約はお誘いあわせで早目に願います。

(五月常任理事会出席者は正本水客、傍島静馬、西田柳宏子、吉田圭井堂、川村好郎、菊田いさむ、小川恒明、西尾榮、戸田古方、菊沢小松園、中島生々庵、不二田一三夫諸氏)

お買物は近鉄へ！



アベノ・上六
近鉄

アベノ 621-1231 上六 771-3331

秀句鑑賞

— 前月号から —

後藤梅志

風呂あふれ魚はこけて妻は亡く

(無聖)

愛妻を亡くした人は、大変な不便をしのばなければならぬ。男性は或る程度、暴君である場合がおおいが、暴君であればあるほど、亡妻の思い出もあり、それが日常の些事一つ一つにつながるのである。

この句の「風呂あふれ」は、みじかい言葉のうちに、その心情があふれて、見る人の共感を誘うのである。

はじめじめしないで調子の高い句だ。体験の句であろう。

人間と暫し争う仁王の眼

(小松園)

仁王さまは、見様によつてはこつけいに見えるものである。おそろしく大きな体をして紙つぶてなどを、からだに蓄めているようすは、決して人間を威圧している様子ではない。じつは悪魔を、人間から防ぐ姿であるに

もかわらず、参拝客は、自分が睨まれているかのように錯覚するのである。

この句は、造りつけの仁王様に、諷刺の眼を配したところに彼我、対照の妙を生じた。作者の詩眼おもしろい。

サボテンの針一つずつ神秘

(アート)

この頃は、一種のサボテンブームである。服部緑地には、東洋一のサボテン公園が出来た。行けば世界各地のサボテンが見られるが、原産地はメキシコのような。多肉質植物でみな、トゲをたくわえているが、日本には早くから渡来した。ピンクの可愛らしい花が咲くのもある。

このサボテンのとげは、頗る神秘的のものが、神秘的とみるか、みないかは見る人のところ、ところにある。作者の直観力は、躊躇せず「神秘」としたが昔は盗難避けにこのサボテンを、家のまわりへ植えたよしだ。

ずくずくになってタクシー集め役

(好郎)

雨のふる日のターミナルや、デパート前には、タクシーと乗り手を結ぶ人が立ち、ずぶ濡れのまま機敏に立ち働いているが、見れば頭から合羽を着て、雨をあびるに任かせている。愚図愚図して居れば、バスがつかえ、ライパンがやってくる。乗り手は先きを争っているし、容易ならぬ役柄だ。街の表情はきびしいのである。

この句は、このきびしい状況を的確に出している。「ずくずく」を「ずぶ濡れ」としたのでは、こうはいかないであろう。

カルテには口とは違うことを書き

(恵二朗)

診療室で医者の前へ掛けた人は、常識のある人でも、おそろしく神経質になる。小鳥のように胸をふるわせて、医者のことを見すえている。医者はなにげなく物を云い。カルテにサラサラと症状を書き込んでゆくのだが、これはもとより独乙語で、患者に分かるう言はないのだが、「口とはちがうことを」書いているような気もする。これが人間の弱さだ。

しかし、この句の通り、口とは違うことを書く場合もある。医者から云えば、それが患者を親切に診療する手段なのであろう。この句は、頭からカルテを否定しているところが面白い。

洗濯機年頃つとめた音で廻い

(与呂志)

洗濯ものを、ザブザブ手洗いする音は、聴こうと思っても聴かれないほど、電気洗濯機は普及したが、古物化した洗濯機は、いまは捨て場もない。

どうにか故障を辛抱してつかってはいいるが、使えばどうやらまだ使える洗濯機である。

しかし、怪物のような音を出すのは閉口だ。もう買い換えようという話には出るのだが、年をとると、女性は不思議とものを捨てなくなる。買換えもしない。

作者も、それを辛抱しているのであろう。

立話すめば箒が動き出し

(弘生)

「立話」をする奥さんは、よく市中で見かけるが、これに大した意味はない。ただおもしろく感じるの、そのあと、すぐ箒が動き出したことである。

こんな風に、はつきりと句に動作があらわれるのは、句に絵どころがあるからと思う。つまりこの句は、絵になる川柳である。

なんとなく、捨て難く感じた句だ。

写真屋は鼻肩の鹿を呼んで撮り

(春己)

奈良公園の鹿は、外人にも親しまれているが、スナップ屋さんは、鹿に餌をやるところをよく頼まれる。

鹿に目じるしでもあるのか、そんな場合、写真屋は馴染みの鹿を呼ぶらしい。ほほえま

しい情景だ。なかには、人語を解する鹿も居るのであろう。

この句は、作者の手柄のよく出ている句である。句柄が、ふくらましてほほえましい。

ちやほやと頭の悪い子に育て

(曉風)

日本に軍人の家庭が無くなってからは、子供の育て方に、お手本がなくなった。

子供は、きびしいシツケを欠いては、欲望ばかりの、あたまたの悪い子になる。

「ちやほや」から、ズバリと頭の悪い子をもつて来たところに、機敏に諷刺が働いたのである。パパさんや、ママさん達には手痛い句だ。

春霞南無大慈大悲観世音

(李朋)

この句は素晴らしい句だ。春霞のあとへ、お遍路さんが上り下りする。四国八十八所の山がはうふつとして目に浮かぶ。

漢字ばかりで、文句無く、春のムードを、このように高揚した句はまれである。新人の着想の活潑さを、物語っていると云えよう。非常に景観がひろい。

縫いたてを見せる人なく春がゆき

(葉子)

独身で、ささやかに暮している女性の、淋しさがよく出ている。

「縫いたて」の一語が句を素直にしたとも

云えよう。身邊の句は、女性にとって川柳に結びつく一番の近道だ。この句は、ならかに読んで「字移り」がわるくない。

独り者出前をつれて帰つて来

(亜也)

「独り者」が、出前もちを生かした。

出前もちを連れて帰るのは、なにも独り者に限らないし、独り者がテナヤ物ばかり食べている訳ではないが、おもしろいのである。急に友達でも来たのか、母親が来たのか。下宿住まいの独り者は、気まぐれだ。

眺えたように卒業式の雨

(蘭幸)

眺えたように、卒業式が雨になった。べつに眺えた訳ではないが、とちすればセンチになりやすい卒業式が、しっとりした感じだ。

校長の話しも、落ちついて聞けた。お別れの挨拶も、あわただしくなかった。という感じがびったり、雨の日にあてはまり、作者は気をよくしたのである。なかなかそつがなく、気の利いた句だ。

川柳雑誌
特製

柳

箋

一冊(五十枚) 三十円
送料 二十円

武田信玄

(1)

富士野鞍馬

武田氏は、源義光(義家の弟)の子孫である。義光の子義清は武田冠者と称して、代々甲斐に居った。それから十数代後が信虎で、その子が晴信で、十六才の時大膳大夫、信濃守となり、永禄二年(一五五九)三十九才の時入道して信玄と号したのである。

信玄は、曾我五郎の生れ変りだという俗説があり、

生れ変って剃髪を五郎する (コリ三二)
富士の前で死んでうしろへ生まれ

箱根にて剃らぬかわりに甲斐で剃り (笈二五)

と、五郎が箱根権現別当に預けられたことなどに附会して川柳に詠まれ、また

信玄に生れて来ても不孝也 (五二六)
という句もある。この不孝というのは、父信

虎が狂暴であったので、天文十年(一五四二)駿河の姉婿今川義元のもとへ隠退せしめ自ら甲斐の国守となったことをいい、この時信玄(晴信)は二十一才であった。それをまた川柳は、

親虎の甲斐なく嗣子に蹴落され

逃げて来たところをすぐでかて置き (二〇八二八)

おやさへおん出すやつと座頭いい (安六義四)

と詠んでいる。座頭は、信玄に追放された百人をいう。

信玄は後年、父を放逐したことを恥じて、終生論語を読まなかったと伝えられている。

信玄は七書にひいで四書にもれ (六二四三)

と詠まれ、七書は、兵書の孫子、呉子、司馬

法、尉繚子、三略、六韜、太宗問答で、四書は大学、中庸、論語、孟子である。それで兵法にはすぐれていたといっているのである。

親に虎家来に馬を武田持 (八七四)

虎は父信虎で、馬は勇将馬場美濃守信勝をいうのである。その馬場を

信玄は馬場桶はくそで責め (六三三八)

甲州の馬場はきたなく退かず (七七一八)
きたなし返せとおっかける馬場が勢

馬場とはいへど尻に付武士でなし (二〇八三六)

などと戯作し、糞をババというのにこじつけて、桶公の赤坂城の妙計にも附会している。また、山形三郎兵衛昌景という勇将も居たので、それを

甲斐の細見も山形がお職也 (二〇二二三)

と吉原細見の山形印の上妓に見立てている。

信玄の旗下には、御使衆といって、百足の絵を書いた旗差物を背にした十二人の騎馬の伝令が居たので、

信玄の下知下知百足触れ廻り (二〇〇四)

甲州の長蛇百足がかけまはり (二〇四三二)
とそれが詠まれている。

武田家には、始祖新羅三郎義光から代々伝えられた「桶無鑑」があった。

桶無はあやういやふな御鑑 (二四九三〇)

と柳川明治 俗風 (12)

・ 奥 津 啓 一 朗 ・

法 界 屋

時は明治二、三十年代、法界屋という者が都市といわず、地方までも徘徊した。

学生が酒を飲んだり、待合にでも出入りしようものなら、とたんに世間は攻撃する。然し学生だからといって、いつまでも十二、三の子供でない以上美くしい物も美しいと思ひ、性の衝動にかられるのも最も旺盛でなければならぬ時代であり、之は男女間に共通で、現に誘う水さえあれば異性と接触しようとする女性のあった事も否定する訳にはいかない。

源氏節や娘義太夫（たれぎだ）に熱狂したり、六区あたりの怪しい女性を求めて、古本を売り払って通ったり、吉原に通ったり、之に飽きると素人娘や年増女に目をつ

ける。順序はともかく、学業はおろそかなり、学校の方も停学とか退学とかになりそれが親許にも知れて学費は断れ生活の途もなくなる。それは、

「書生さん、伊達に虚無僧するでない、親には勘当うけ学校落し、ササきたこらしよ、仕方がないからねエ、私月琴持って門に立つ、一文おくれ。（さきたこらしよ節）」

と自らを歌わしめている。こうした立場になると、生きがための欲求と恋愛のものとのために女とも別れられず、意思の弱い者はすると深間に填り込んでしまひ中でも最も浮つ調子な連中が、女とも相談の上でこの法界屋となって市中を横行したのである。

法界屋身は雲水の浴衣染

金角子

法界屋燕趙悲歌の成れの果

芝 軒

法界屋仔細を聞けば若旦那

長谷坊

法界屋赤門前で知己に逢ひ

薦 雄

この法界屋は一人で来る事は殆んどなく必ず女を連れて居るか、または夫婦者が二組一緒になっていた。男は白の勝った立褌の荒い袴（はかま）、目の覚めるようなかすりの着物、金ぶちの眼鏡。これらの者が奇妙に明治とか早稲田大学の制帽を冠っていた。また女の方はエビ茶の袴に、荒いカスリの着物、頭は当世流行のエス巻、色白のまたこれがすこぶる美人だったという。

楯無と青梨申妻で名が高し (六八10)
と詠まれ、青梨は甲州名物である。

信玄は、諏訪明神を信仰して、諏訪法性の兜を冠つて居た。

信玄の頭にやどる諏訪の神 (四一6)

二十四の頭にやどる諏訪の神 (八八4)

武田には二十四将が居たのである。

大將も煙草もきついで一ヶ国 (五〇17)

気のおふな多葉粉信玄きこし召 (四六28)

甲州煙草のきついでと信玄の氣強いのを詠み、

梨子葡萄二十四将の夢の跡 (一五三25)

甲州はさすが武道の名所也 (四九12)

名産葡萄と武道をかけても詠まれている。

天文二十二年（一五五三）隣国信濃の村上義清が、越後の上杉謙信に救いを求めて以来

ずっと謙信と戦いつづけ、その川中島の合戦は有名である。

信玄と謙信雪軍が合ぬなり (一四三1)

本誌表紙へ毎月ご執筆の
直原玉青先生指導

青 玲 社 展 覧 会

とき 六月七日から十二日まで
会場 大阪阪急百貨店八階催し会場

蘆溝曉月——大陸放浪——東野大八——

蘆溝橋——といえば日本人なら大抵の人は知っている。

この蘆溝橋の一発の銃声が、日本を敗亡の淵へ追いやってしまった。つまりシナ事變の発端をなす一発であり、それが太平洋戦争へとつながり、日本が無条件降伏という最悪のコースをたどった出発点図だったのである。

支那事變、昭和十二年七月七日夜半、北京の南郊の豊台に駐屯していた日本軍が、永定河という川にかかっている蘆溝橋の近くの空地で演習を行っていた。そこへ南方から突然射撃をうけた。河の堤防のところに中国保安隊の分駐所がある。日本軍はすぐこの分駐所に向って応戦した。すると左の方一キロのところにある宛平縣城に駐屯している中国軍が、これを応援して射撃をはじめたので、日華双方から死傷が出、本格的な戦斗になった。犬養健「揚子江は今も流れている」(昭和二十六年発行)

この蘆溝橋事件が突発した翌日「事件不拡大命令」が出たが、結局北支に三個師増派となり保定、太原、徐州、南京、武漢と戦火は拡大し、上海にもそれが飛び火してどえらい戦争になっていったのである。

私がM紙の北京駐在で、北京暮らしに入ったとき、この蘆溝橋だけはぜひみておきたいと思った。その念願かなって、この橋の上を歩いたのはたしか昭和十六年の夏だったと思う。このチャンスは、華北交通記者クラブにいたことによるもので、見学の理由は、この橋の下を流れる永定河の治水工事を視察するとのためのものであった。

北京の東安市場には、当時「蘆溝曉月」という拓本が一枚五十銭で売っていた。宋朝風のこのでっかい黒い刷ものを、私は部屋のドアにピンでとめて、長いことぶら下げていた。この拓本は、橋の近くに建っている碑面からとったものだ。

さて、私たち一行は、その日華北交通さし回しのハイヤーで現地についた。

橋体は、白い代理石の風化したような具合の、ざらざらした石のすりすがついていて、一定間隔毎に獅子頭の、角い石柱がつけられている。相当な長さで、橋床も石でできているが、川底にほとんどふれんばかりである。これを見ても、永定河の流砂がみなかなものでないことがたちどころに感じとれた。

犬養健は、さきの著書では、この橋のことを蘆溝橋と書いているが、この橋は「マルコポーロ橋」が本来の名で、蘆溝橋とは宛平の側にある台地の地名なのである。

何はともあれ、やがて戦斗帽をかぶった作業員の一人の幹部がわれわれの前に現れ、橋の中央へと連れ出しいろいろと工事の説明をした。古い語でできたことはハッキリとは覚えていないが、なんでもこの橋の下流にもう一本の川筋を作り、本流に水が溢れるとその

人工の川へ水が自然に入る仕掛の溢流堤というのを作るのが工事の主眼だといった。

「日本人にとって、ここは歴史的な貴重な橋です、その名分にかけてもこの橋を守ろうというのが政府のハラでしょう。まかしにおいて下さい。中国の大黄河を日本の技術は着々と征服しつつあることでもあり、こんな黄河のヒヨコみたいな川筋なんぞは……」と元氣にこの人は語るのである、精かにして知的な風貌のこの中年の技術者の顔を私は今も記憶していることだが、果して今も健在かどうか。

われわれは、やがて橋のたもとの、夾竹桃がたわわ咲きほこる台地の草っ原で、持参のサイダーやケーキをひろげた。

「蘆溝橋の銃声は、中国軍でも、日本軍でもなく、実は八路のゲリラ隊の発砲だそうですわね」

われわれの仲間に加って、世間話をはじめていた。その土木屋さんは知的な眼をものやわらかく光らせながら、何気なくこうきり出した。

「そうだそうですね。しかしこんな話はいまり口にしらない方がいいのじゃあないですか」とわれわれのうちで一番年かきの同盟通信のKがそう相槌うって、あたりをじろりと見回した。

犬養健の本にも、このことが出ている。それによると、日本軍の広渡中佐が軍使となり中国軍まで出かけ、先方の将校に「申しわけない」「いや当方こそ」と陳謝し合って後、その中佐が引返しにかかったところ、不意に機関銃の一斉射撃をあびている。

「すっかり真相がわかったよ、ちょうど両軍の死角にあたるところから射ってきた。八路の停戦協定のぶちこわしなんだ」と広渡中佐はいっている。

このことについて、当時陸軍省軍務局満洲班長だった片倉衷氏（大平商事会長）が鮎川義介氏らとの座談会で、つぎのように言っている。

「戦後の研究ですが、国際政治学者たちの研究の結果では、蘆溝橋事件は共産謀略による発砲であったとの意見が一致しています」（三十五年発行「財界」）

私も鮎川さんが岐阜へ来られた折に、この点をただしたところきっぱりと

「あれは八路の仕業です」と言い切っていた。

ともあれ、現地も現地、その問題の蘆溝橋で、われわれはすでにその真相にほど近い話をやらかしていたわけだ。まさに運命の十二月八日に先だつこと半歳以前である。

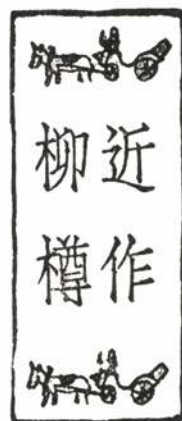
こういう事実を知りながら、軍部はなぜそ

うしたことに眼をつぶり「暴戾なる中国軍閥」を国民に吹きこみ「聖戦」という名の「侵略」の武力行為を開始したのか。察するに共産きらいのはずの軍部が、あえてそうしたことに眼をふさぎ、中国軍に向って戦端を開いたのも、シナ軍をなめ切った中国征服への野望にはかななるまい。

こういう真実を真実として、当時正しく事件を追及し処理していったのなら千載に痛痕を残す十二月八日も生まれては来なかったはずである。

怨みは深し蘆溝橋もこうなるとバカなことをやらかした身内の愚かさへの憤りにつながっていく。不ていな人間の野望が、民族の優性誇示につながるとき、その武力は惨めにその武力そのものの誅求（ちゆうききゆう）をうけてみじめに減んでいく。ドイツにして然りそして日本もだ。

蘆溝橋月一いま人民中国ではこの碑の横に健国の碑を建て添え、同志よわれらの建国の発芽をここにみた、という風の碑面の文字をつづけているという。この二双の碑の表に、永定河の太陽はいまも人間どもの抱く歴史の哀歎を冷たくあざわらいながら、てりがやいていことであろう。その下には、夾竹桃の色どりにことよせて、いまも無心の草木は茂りつづけ、永定河も流れつづける。



北川春巢選

名古屋市 吉田水車
卒直に認め大臣坐に戻り

ボーイングの事故に

フジヤマも君には仇となるばかり
痔にわるいものが好きなり痔に悩む
倍の倍働いたとて小企業
笑うまじデラックス車の成田山

倉敷市 水谷水

港町らしく金髪芸者も来

ふるまい酒吸水ポンプのように飲み
朝化粧年上だからするのんよ

どこでも妻は眠れる芸を持ち
人を見る目ができた頃詐欺に合い

松江市 町中村 魚

むかしから村に鍵っ子あり農繁期
保育園鯉の浮く池たのしい日

訪問記表彰農は口重し
作柄の話になると農夫口ほぐれ
湖に帆が二つ三つほしい夕焼けだ

尼崎市 海士天樹

婚約の二人にしとく用が出来
屋号にも困りエス語でつけておく
痰液を知らぬ絶景海苔育つ
窮屈な折に貫禄見せる鯛

鳥取県 鈴木村 諷子

おかしくもないのに笑うて活きなけりや
法律をかじってことをもつれさせ
工場誘致して門衛に志願する
扇風機まで上役に首を振り

奈良市 村上春巳

一坪も持たんのに車買いたがり
風呂へ行く僕とは知らず楼散る

ジエース飲むだけにお世辞言うてくれ

大阪市 吾 郷 玲 人

アランへどうです旅行の案内所

仮睡する巡査の耳が動くよう

プロイラーになる運命を啼きつづけ

石川県 同 村 虹 要

花嫁さんおもちゃみたいにな欠伸する

抜てきをされて苦しい日が続き

釣れんでもよしアベックの浮しずか

愛知県 横 紫 光

ひとり言にしては大きい祖母の愚痴

倦怠期枕カバーもうすよこれ

スピッツへ唇おしげなく与え

倉敷市 水 粉 千 翁

のんびりとしてますのよと貯めている

還暦のこれからという骨が鳴り

香炊いて冷えるあの子の初彼岸

大阪府 河 本 雪 男

星空を仰いで凡人夢を持ち

大あくび我が家に平和な日が続く

山奥のここにはほとんどの人が住み

愛媛県 近 藤 つ ぎ 子

満たされぬ愛鍵っ子は爪を噛み

胃袋の予備があるような呑みっぷり

お隣りのエレキ血圧また上がり

三島市 池 田 晴 子

平服でと言う招待にふと行く気

ゴルフにもボーリングにも飽き石磨く

最高の悪相手配の顔写真

新居浜市 日 浅 木 珍

鶏がまた小遣を生んでくれ

お悔みを言うて造花屋儲けたり

寒行に行く日の母に見る笑顔

竹原市 小 島 蘭 幸

女でも出来る仕事に身につかず

願うことなし神様に掌を合わせ

そこまでは判りませんと他人なり

大阪市 豊 河 好 永

娘に甘い父だと母がはいがり

定期異動なくてはならぬ人がなく

裏金のことにはふれずよくしゃべり

鳥取県 わたなべ・かずこ

新婚が来れば仲居もうきうきし

老芸者売りものの芸おとろえず

労働歌唄う芸者の近代化

竜野市 森 下 峰 子

つまはじきされても母と言う味方
新妻のもてなし移り香も貰い
ふくらみに耐える釦をしかとつけ

愛媛県 嶺 本 満 子

母さんのいる日曜は春のよう
出世街道で汚職と云う石につまずき
コマソングきっちり覚えて音痴なり

奈良県 木 村 よ し を

年甲斐もなく新婚にあてられて
待ち合す時間で愛の量を知り
又値上ママの眉毛もつり上り

鳥取市 近 藤 秋 星

桜散って元の静けさ取り戻し
夫婦愛燕夫婦に教えられ
一人では体裁悪いので誘い

岡山県 目 賀 芳 月

素人に貸す鋸も備えとき
葉桜になって国宝らしくなり
子宝が五人貧しさを相殺し

八幡浜市 平 田 砂 生

内職へ汚職のニュース手がしびれ
自家用車持って書棚のない暮し
ミカン村邪魔になる子を塾へやり

出雲市 竹 内 李 朋

ナツメロでゆこう気の合う酒となり
肩書をぬいで麻雀掻き廻し

高石勝男氏逝く

思い出はワイズミューラーとの決勝

大阪市 西 山 栄 子

へソくったままで使わず女老け
とり返えしのつかぬ齢まで来てしまい
和服の日メス持つ時の顔でなし

岡山県 瀬 戸 山 文 平

大学を出て麻雀の腕が冴え
身をしばる金を憎んでぐれはじめ

河内長野市 森 本 黒 天 子

台所用品揃わず茶釜でんと据え
膝節迄見える向いで目をつむり

七尾市 松 高 秀 峰

聞こえない振りも社長の板につき
雑草の強さが今日の地位につき

伊丹市 春 日 丘 二

小銭にぎって待ってたバスに放つとかれ
一本の指揮棒に公会堂ついて酔い

大阪市 今井 岳太

アベック達の足ののろさの中を行く
ふり向かぬ背よ恋は去って行く

高知市 吾^{須藤俊正改め} 亦 紅

先ばいに聞いて養老院の金を貯め
狂い咲きと我もみとめる恋と知り

福島県 九鬼 六十二

クラス会なぐさめ合うて離婚組
スカートが非行へひざ上十センチ

青森県 岩 淵 一 星

二次会は安月給がもたせられ
サイダーを立てて肝臓修理中

大和郡山市 中内 孚彦

恋人を呼ぶのは小さい方の声
クラブ勧誘猛練習は伏せておき

高知県 山川 勝子

雨上り落花をつけた傘も干し
恢復期見舞客待ち花も活け

三島市 潮 見 タツヨ

倅せが腕一ぱいに兎の重み

割烹着の素顔心も見てもらい

三島市 久保 昌代

月旅行よりもそここしたい旅
手形とは何やら知らず貧に馴れ

三島市 宮崎 和子

紅葉狩りこっちは稲刈っている
精一杯生きて娘を嫁がせる

羽咋市 三宅 ろ亭

出世せぬ男とバーで意気が合い
活花展たまには妻に孝行し

広島市 上代 美文

小駅の造花にあらず春を飾る
小言聞くのも月給のうちと思ひ

羽曳野市 谷垣 史好

こみ入った話へ仔猫膝を降り
大学パスさこれから遊んだろ

大阪市 和田 痴亭

稀少価値母の大切な鯨ざし
母系の血ひいて文芸愛好し

高槻市 山田 スミ子

洗濯機も有り洗濯板も要る暮し
楼咲く春が家計簿狂わせる

大阪市 西 本 保 夫

オールドミスのショック同僚再婚し

内職へテレビはつけたままで置き

大阪市 坂 川 有 子

薫風に心とざせり小さき悔

指輪など嵌めたき夜ありひとりいる

茨木市 高 木 繁 太 郎

春彼岸疾風に襟を立て回向

内孫の仕合せ祖母奪い合い

布施市 坂 東 若 芽

仕合せを敷かれてる敷かれてると他人

うちの子は出来ぬが兄の子を自慢

和歌山県 山 本 泣 笑

二日酔蛇口へ朝の長いキス

ガレージの無いポンコツへ春の雨

大阪市 森 本 良 夫

満面が笑い修学旅行の娘

お弁当つくる親まではずんで来

大阪市 中 谷 ハ ナ 子

税金へああ我が腕のかぼそすぎ

春や春世間ばかりが華いで

松江市 岡 崎 祥 月

我が家を巣立った子等の貯金帳
春がすみここにも一人ノイローゼ

大阪市 小 東 琴 女

ダブルプレー都おどりとお花見と

おしのびで来た側近は座を外し

小野田市 西 畑 霞

米櫃の音がかわった長い雨

叱られるために出された茶が熱い

仙台市 川 村 映 輝

つまらない仕事に生活支えられ

虫酸走しるような奴にも妻が居た

愛媛県 関 本 柳 剛

配膳車春が綻ぶきしみよう

春一番雛人形をいじけさせ

玉島市 井 上 旭 峰

花鉄み意に逆うて婚期ずれ

老夫婦細い煙りの中で生き

北九州市 三 上 春 雄

孝行を笑う我家の全学連

金借りる特殊技能で廻り椅子

羽曳野市 杉 本 白 扇

デモの足もうデイトの足となり

天王寺先祖の名前想い出し

羽曳野市 江城 功雄

故里にわが初恋は惹なし

人生の縮図に似たり足の萎え

米子市 石垣 花子

老いて尚歟持つ人生うたがわず

慰労会 社長挨拶だけで消え

尼崎市 岡本 昭三

保証人だれだったかなと思ひ

本家らしく長兄じゆずを持ち

伊丹市 中島 憲昭

時差出勤セーラー服が見られない

やけ酒を飲んでた処へ聞きに來た

大阪市 有田 実根子

縫いたてのバパの見立ての帯で逢い

わたしは柄夫は値札ばかり見て

大阪市 栗田 くり坊

ふられまいと舞踊にあくびかみ殺し

あくびが出た時この恋が終る

寝屋川市 福富 隆子

定退の嵩は文化からはみ出

神経のビリビリ動く人でもめ

大阪市 谷沢 源川

針の目も通らぬ年で派手好み

爪に垢ためて密柑の皮をむく

大阪市 田中 多幸

遠くからステッキ振るくせ友と知れ

爪に火で貯めた遺産が子のけんか

大阪市 木村 浊水

狭き門子は山賭けて親はコネ

麦踏みのもんキダンスのムード出し

大阪市 鈴木 生仏

花もよし葉桜もよし飲むもよし

町内の花見で妻の声を知る

大阪市 小谷 葉子

美粧院子ども無いよな顔に出来

顔知らぬ母の墓石に霧深く

大阪市 西川 誓二

定年に思う

定年にペンだこの跡いつくしみ

子の高校合格を喜ぶ

今夕からテレビのポリウムうんと上げ

島根県 堀江 俊夫

友情のノート届いた病氣の日

松山市 西 川 都

バレンタイン炬燵で聞いている老後

善通寺市 伊 藤 歌 子

としよりの預金孫をよろこばせ

大阪府 新 田 忠 雄

ドヤ街のルポさまざまのにおい嗅ぎ

竹原市 三 宅 不 朽

食卓へ気になる事をコマージュ

大阪市 佐 藤 雅 美

その先は聞かず話題を変えてやり

堺市 斎 藤 亜 也

特価日に大がつき超がつくマーケット

大阪市 佐 藤 勝 利

人並に我も迷よてるペンネーム

米子市 八 木 千 代

ともかくも子は大学にたどりつき

大阪府 新 田 釣 月

上役の声色もでる無礼講

松山市 河 本 南 牛 史

サボテンのビニール脱す春となり

米子市 佐 伯 越 子

労働歌音痴も声を張り上げる

京都府 菊 沢 破 天

親切に子供あずかりこげつかせ

大洲市 堀 内 曉 風

廻り道しても時間を持て余し

笠岡市 木 山 要 次

お天気をはめて話がまた途切れ

広島県 南 条 露 声

限界が来た訳で無し気ははたち

伊丹市 芳 岡 正 弘

待つ者もなくアパートへ着く午前

名古屋市 花 東 千 久 良

美しい顔して婦人科へまた頼み

東京都 浅 野 竜 泉

オールドミス変な所で意地をはり

尼崎市 井 沢 正 直

隆鼻術亭主の地位だけかきあげし

米子市 林 瑞 枝

縁談に寮母が押した太鼓判

島根県 小 砂 白 汀

過ぎた頃余震のような風邪を引き

島根県 堀 江 芳 子

貧しさの中に倅せ入学日

島根県 石田 清泉
馬鹿馬鹿馬鹿おんな涙でもたれて来

島根県 堀江 正朗
頼りない夫にしきりと助けぶね

堺市 田中 しげる

歌舞伎にもシェーを入れる大名題

京都市 房本 三千男

長女と歩いているのに冷やかされ

鳥取市 岩田 八文銭

河は流れるがデイトの道でなし

大阪市 柳生 政夫

初孫にパパと呼ばれてあたり見る

大阪府 花田 繁子
雨続きおもちやとおしめで座られず
借金におわれ家でも落ち付けず
大阪府 上林 清江
小春日にとぼけたような蝶が飛ぶ
大阪府 田治 一登
峠道聞かんとすれば地藏尊
大阪府 松村 喜久
お彼岸を喜ぶような年になり
愛媛県 豊島 二九三
春をわがもの顔にする桜こざかし

雅号ぶっちゃけばなし (14)

もっしょくし



・市場没食子・

いちば

私は写真屋さんとよく間違えられる。現像液中に没食子の文字のあるのを知っている人から。私は薬剤師なんで職業に因んで雅号を選びたいと、生薬学を繰り、付けたのが五倍子所が大正末期の婦人雑誌に、五倍子と云う筆者があったのを偶然知り、止めてしまった。寶郎子にも食指が動いたが、結局この号にした。もう四十二年も前のことだ。寶郎子はその後今は故人となられたが、橋爪寶郎子と云う薬系に偉い人が出た。十七、八年も前に改号を路郎先生に相談したことがあるが「君はそれでええ」と云われ、そのまま現在に至っている。最も時に依っては、千葉斜山を使ったり、中西右月を使う場合もある。

薬剤師・六十四歳

麻生路郎 著

新川柳

川柳の
味わい方
鑑賞

定価 二百五十円
送料 八十円

大萬川柳と

梅里の句について

清水白柳

川柳塔へ発表の百七十三回大萬川柳の選を
してほしいと梅里さんから言われて驚いた。
何と言っても百七十二回も路郎先生がその
間、一回の休みもなく続けられたあとだけに
何か知ら怖かった。とてもとてもと思った。
そして私の選では投句が減るかも知れないと
も思った。そうなのは大萬川柳の名にきず
がつくかも知れない。とても荷が重いのでそ
の器でないことを申しのべて辞退したのでが
梅里さんの編でにのせられて引受けてしまっ
た。

考えてみるとこれは私にとって選者として
の試験を受けるようなものであり、また真剣
に投句と取組む晴れ土俵なのだから、やり
甲斐のあることだと思って敢えて選に当る事
にした。投句は「大萬川柳」の規約に書いて
あるように梅里さんが一句毎に句箋に清記し
て、番号だけがついているのだから句主名や
筆跡などに惑わされることがなく選が出来る
ので、清記は煩わしいことだろうが、選者と
しては本当に選がしやすいシステムにしてあ

るのが何よりも有難いことだった。

選句は句箋のまま大萬へ返すので作者名は
梅里さんから原稿になって編集部へ届くまで
判らないので、後味のよい選句が出来るのを
いつも感謝している。そんなわけで梅里さん
も、路郎先生の選のときは毎年一位、二位と
上位を占めていたのに、白柳選になって下位
に落ちたのは今迄の力量を疑われるとあって、
だれよりも作句に苦心して居られるのが実情
である。これまで上位を占めることが出来た
秘訣は何であろうかと誰れしも考えるのだ
が、それについては昭和三十五年四月号の川
柳雜誌にこう語って居られる「みなさんの投
句が来てからでは作りにくいので先ず最初に
十句ばかり作っておく、そして切つてから
清書しながら、同想の句にぶつかると思ひ
句でも私の句をボツにして、別の着想で作句
するので、これがいつも上位を占める秘訣と
でもいうか、何かがあるなど思われる点でし
ようか」と書いて居られるのである。大萬川
柳への投句者は作家揃いなので句のレベル
が高く毎回のように没にするのが惜しい句が
多くあって頭を痛めているのが実情である。
だから添削は一切しないことにしている。で
におはの違いで惜しいなと思う句も没にする
ことになる。同想の句では余程表現がすぐれ
ていないと入選がむづかしいということであ
る。

さてここで大萬川柳の第一回を振り返って
見よう。昭和二十六年三月二十日発表第一回
「呑み仲間」路郎先生選の地位に

呑み仲間娘の婿も頼んどき 梅里 が入選
している。この時の集句は百三十二句、入選
句は二十句であるが、それが発展して昭和三十
七年六月には、集句六百十三句。入選句数
四十五句という厳しさになっているのを見
ても、その内容の良さを知ることが出来ると思
う。

ここで梅里さんのことに触れて置きたい。
川柳昭和三十六年五月号の柳人録によると、
大阪は島の内を生れで、明治四十年五月十九
日生れということだから来年在選歴とは思え
ない若々しさである。川柳に手を染めたのが
昭和十五年九月というのだから柳歴二十五年
という古豪である。句にあらわれた若さと、
女性を詠んだ句が多いのも定評のあるところ
だし、大阪弁に關しても色々調べて居られる。
そうしたところから生れたのが

命まで賭けた女でこれかいな
相惚れやおまへん辛抱してまんねん
中毒で二人仲よう寝てはりま
ホームバーあつても外で飲みはりま
などの句にかけたのだろう。

世界中にかけがえのない好きさひと
窓しめらてから手枕を膝にかえ
夜が明けて拗ねた時間が惜しくなり
拗ねている背中つつけばはねかえし
まだいくらでもあるのだが先を急ごう。

盛り場の軒三尺で飯が食え
北風の夜店は胡座かいたまま

この二句には職業意識に徹したというか、も
のを見つめるするどいひらめきがある。次の

句はその意識の中からいつの間にか出来たという型の句である。

箸割つてくれたで出したふところ手
すき焼へいるは仕込みという手つき
落籍されて切れて仲居をしています
かくし芸やおら秀才詩を吟ず
叙情的な句もたくさんあるが

国なまり磯の匂いの中で聞き
独りもの宵から雨の音と寝る
ふところが寒いままなり春の風
街角にリルが出そうな霧の夜
傷ついた雀施設の子に飼われ
ビルの窓誰が吊りしかきりぎりす

はいけい

不二田一三夫宛

大井正夫

お茶づけをたべた後の「ラッキョ」を食
べたような感じのする柳誌……川柳塔。

御誌には古くから親しくしていただいて
いる柳人が多く、水客さんの句会吟のうま
さ、すゝむさんとは悪友に近く、梅志さん
とはあまりにも古く、薫風さんの川柳塔愛
には頭がさがります。摩太郎さんが府庁に

春雨の口三味線とすれ違い

などを挙げることが出来る。殊に口三味線の
句などは梅里さんでなければ詠めないだろう

傷心を想い出のある湯に癒し

朽ちるとも松の名所で知れわたり

現実の壁に希望がくずれかけ

一と筋ですがるころに動かされ

大仏さん一ベン付つてみたかろう

堅い叙法で句にしているが矢張りその底には

梅里という作者の個性を見ることが出来る。

波の音シーズンオフの窓をしめ

美少年の末路は恋に刺されけり

男ざらいされど眠れぬ夜もあり

居られた頃作句をすすめたうちの一人です。
古い話です。

大八さんが書いていた大陸モノ、たのし
みにしている読物の一つ、彼とは三十年來
の悪友です。田なじみの啞三味の追悼句会
に浮世のわずらわしい事が四つも重なり、
残念ながら上京できず、啞三味ユルセよ

五月号の御誌の表紙画をみて、土佐の高
知のカツオのたたきの味を想起してノドを
ならしました。——プンと、ニンニクの匂
いが鼻をぬけます。

七月十日の路郎先生忌句会には、末席を
けがさせていただくつもりです。

阿々大笑して悪名聞き流す

馳つけた顔へ待つ身の愚痴も出ず

こころあたりになると作者梅里の柳歴がもの
を言っていると言えるだろう。

いざこざの憂さを晴らした夜店

ブラカード鰻の匂う橋に佇ち

吊り皮の肱はお乳の触れる位置

殺されて雲を見上げるエキストラ

汽車賃がだんだん故郷を遠くする

十代の恋はみつ豆からすじめ

免に角あまりひねらずにすらりとした句の多
いのが一つの特長かも知れない。そのすらり

とした句の背後に深いものを秘めていて心に

触れるのが佳いと思われる。ここに採り上げ

た句の殆んどは大萬川柳の句集の中からであ

って、一部分あべの支部句報のものもあるが

課題吟ばかりである。真剣に課題吟に取組む

心構えがこうした佳句を生むということを、

梅里さんは身を以て示してくれているので

ある。最後に身辺句を二三挙げてみたい。

途中から抜けていくものごとで逢い

これは作者自身のことではないことを断って

置かねばなるまい。

兄弟がチヨボチヨボであり恙なし

仲の良い兄弟というものは他所目にも羨しい

限りである。

栄冠へ内助の功は忘れまい

こと川柳に関しては梅里さん程家庭的に恵ま

れた柳人はないと思う。それがこうした形の

句になって家族の人々に作者が感謝している

のである。ここに川柳の有難さを知りたいと
思う。

(2)

君雲と話す心になり給へ
寂光へするどく笑う仏さま
仏性の土にこぼれた鱗の目
かなしき多く夫人は歌をよみならい
怒とはさびしきものをものともよ
風よ吹け風のなかなるひとりほち
路郎選になるかつての「川柳塔」は個性育
成の場でした。長年師事した人々は句主の名
が不用なまで、それぞれのカラーを具えた作
句をして来ました。

(二) 庶民性

輝くやもとより金に嫁せし身の
玄関に位負けせぬように立ち
大旦那一人へ暮の風呂がわき
怨念を質屋かまわず蔵に入れ

乱 錦 福 剣
三 魚 造 花
さん 坊

八公も句主になり得ました。曰く、商売づくし、階級づくし、人一代。大して骨を折らずとも立所に揃うのが川柳でした。

(三) 個別性

不路沐
詳郎天

路郎先生は川柳は社会批判の詩だといわれましたが、批判こそは人生詩川柳の独壇場で

たばこほんつんの前に一つあり かほる
ドレスきてやつぱり容子して走り かほる

(六) 國際性

俳句や川柳が外人に関心をもたれはじめて
いるともききます。しかし、環境の違いとい

— 42 —

いますか、日本の風土、風物に馴みにくいの
 でしよう、俳句という外人の作っているも
 のの内容は川柳に近いものになっているとも
 ききました。又、川柳の欧訳については「川
 柳塔」十二月号に阿部佐保蘭先生が「英訳川
 柳の灯は消えず」を書いていられますが、日
 本語の味をうつすことはなかなかむづかしい
 らしいです。それでも、その努力をつづけて
 下さる方のあることは有難いことです。

路郎先生の名作

俺に似よ俺に似るなと子进行
 の二種の英訳を御紹介して参考に供します。

Deep I think of my kiddy,
 That they would just like me grow,
 And not to resemble like

Aso Jiro,

"Yes resemble me,....."

Nay don't resemble me in nature,"

I think of my child By Jiro.

それでは川柳が特長と考えているのは何で

大阪市 橋本 緑 雨

雪がまだ残っていますと
 山を降り

先妻の三十三回忌

生きのびる話

娘も死にました

しようか。

従来、川柳が三つの柱のようにいつて来た
 のは「皮肉」「滑稽」「軽味」であります。
 川柳研究家英人 R H ブライス氏も川柳のこと
 を「世界の諷刺詩」といつていられます。

しかし、今日の川柳は、その枠に入りきら
 ないものが、かえって多くなっているのでは
 ないかとも思われます。路郎先生は「川柳は
 人生批判・社会批判の詩だ」とおっしゃいま
 した。しかし、その批判は単なる冷たい批判
 ではなく、人間を陶冶するための批判でなけ
 ればならないので、人情味の句の占める位置
 が大きくなりだしています。近頃の句会でも
 上位にあげられている句を見ますと、笑いの
 句というより、建設的と申しますか、しんみ
 りさせられるものが多くなっています。手許
 にある句報の中から拾ってみました。

買物を頼めば母が足してくれ
 雑踏に押される母の肩を抱き
 親切な吏員へお辞儀して帰る
 飾らない父の言葉にある温味
 という調子です。

一 舟 静 馬 静 馬 榮 馬

それに感覚の句もふえていまして、諷刺は
 薄くなってきています。これはいぢがいに悪
 いとばかりは云えないとは思いますが、句に
 笑いが少しへった様に思われたせいか、新年
 号にユーモア特集をされたのも、笑いを忘れ
 ないさんというつもりでしょう。しかし、

仕舞風呂一本足がとんでくる
 にわとりがあくびをしたとつんほいい

大 門 古川柳

南無女房乳をのませに化けてこい 古川柳
 ユーモアといっても真実味の深い泣き笑いの
 人生、ペーソスに引かれがちなのが今の川
 柳人です。
 したがって桑原先生が「第二芸術」の終り



の方でいわれた「床屋俳句ならびに川柳」云
 々の部分は特に原文を引用しておきましたが
 「附合い」といった様な駄洒落や語呂合せ、
 口あいにも類する可笑味と現代川柳はむしろ無
 縁といってもいいのであります。

これで消極的ではあります。川柳の近代性
 について述べたつもりです。

次に近代性が近代文学とまで発展し得るか
 どうかに、挑んで行きたいと思うのでありま
 す。

教	作
室	句

研究題
「叩く」

清水白柳

どこやらを叩けば器用に鳴るラジオ 柳太
横着な時計叩けば動き出し 不朽
古時計叩いて修繕また伸ばし 瑞枝
いつも言っている事が題詠というものは
課題にとらわれて題を説明した句になり勝た
が、今回の集句は題が動詞だった関係が着想
が、今回の集句は題が多かったのは嬉しかった。こ
の三句は着想も面白く表現もそれに伴ってそ
れぞれ成功している。ラジオの句はどこやら
というところが面白い。素人には難かしい配
線などわからないから、ポンと叩いたら鳴り
だしたのである。うちのテレビとよく似てい
るので思わず吹き出した。横着な時計は腕時
計であろうか。修繕また伸ばしというのも面
白いのは誰れでも経験のあることなので共感
が持てるのである。

鳴き龍へ今度は妻が手を叩き

李朋

この句の焦点は今度は妻がということに
ある。仲の良い夫婦の楽しい旅を描いていて

ほのぼのとした雰囲気である。

手を叩く方に歩んで子はころび

万竿

ここにも楽しい家庭がある、漸く歩き始め
た幼児を聞いでの笑い声が聞えてくる。

春の陽にふくれて布団叩かれる

滋雀

カラリと晴れ上った青空に干された布団は
ふっくらとしている、その手触りも楽しい。

青春をドラム叩いて悔のなし

酔夢

あの騒がしいドラムのどかが良いのかとも
思うがこれは明治生れの頭のせいであろう。

作者にもそんな考えが頭のどこかにあるのか
下五文字の悔のなしというのがそれを物語っ
ているようである。

ベニヤ壁叩いて釘打つとこを決め

弘生

プリント合板の下地の間かくを調べるのに
叩いて見るのが一番判り易い。それをつかん
でいるのは佳かった。

監督に肩叩かれて守備につく

初穂

ナイターのテレビを見てみるとよくこうし

た場面がある。バッターの肩を叩いたら守備
じゃないなどと理屈を言っではいけない。

ボンと帯叩き仕度の出来た音

要次

結んでもらった帯なら後ろから叩かれるの
だが、自分で結んだ帯なら前を叩くだろうが
とに角仕度の出来た音には違いないのだ。

すねぽんと動き脚気は大丈夫

露芳

最近脚気は余り聞かないが以前よくこう
して叩いた見たものだ。古い思出のようだ。

軽く肩叩き大丈夫と主治医

若芽

心配せんでもいいと安心させる主治医の顔
も思いなしが明るいのである。

引っぱられ叩かれながら立ち話

与志

立ち話の長いのは常識だが、その状態を子
供の動きによって適確にあらわしていて佳い

さんさんに叩かれて出た会議室

保夫

この叩かれては吊るし上げである。会議室
という五文字が生きている句であって佳句。

また出来たのよと夫の尻たた

千梢

面白い句である。あんたしっかりしてよと
はげましているのを詠んだのだ。

叩かれて叩かれて衣鉢縫いで居り

白江

叩かれたあの日の師匠にいま感謝

竜泉

叩かれて五年曇つぽやと持ち

清泉

初めの二句はやや概念的であるように思う
一句目の衣鉢が若しハッキリした職業なり技
能に限定されていたら佳い句になったと思う

二句目の師匠にも同じことが言える。墨つばの句はよく判る。それは私が大工だからということだけではない。やっと持ちというのが生きた語になっているのである。

独りっ子理由もないが猫叩き
姑への腹立ちに猫叩かれる
瑞枝 若芽

叩かれた猫二つ目の身を締め
娘句案

とつくみ合いをする兄弟のない独り子は淋しいだろう。その淋しさが猫を叩くのだ、叩かれるための猫だと言えぬこともない。姑への反感は深刻である、これが昂じてくると大変だと思ふ。二つ目の身を締めというのはよく描写されていて目し分のない句である。

蚊を叩く他人の肩なら強く打つ
鉄舟

春の蚊を叩く手母に抑えられ
千代

蚊のいのちもう満腹を叩かれ
李羅

他人の肩ならという句には穿ちがあるが一寸理屈を言つてようなのが氣になった。春の蚊の句は何故母におさえられたのか判らなかった。満腹の句は面白いがこれ以上作者が面白がってはいけないと思ふ。

蠅叩きブラウン管を遠慮して
政次郎

心して叩けば蠅はよみがえり
不水

手をもんでもだめだと蠅を叩きつけ寿美司

蠅叩き蠅の知能にかわされた
秋月

蠅を叩く句はまだあったがこの四句は、ブラウン管、よみがえり、手をもんでも、蠅の

知能、というようにそれぞれの焦点を持っているのでよいと思つた。

寄らぬ鯉手を叩くにもこつがあり
母李
手を叩くにもこつが要るのは少し変な氣がした。こんなところがあるのかも知れないが作られた句のように感じられた。

この坂だ牛よ濟まぬが叩きます
不朽
都会ではもう見ることが出来ない光景だが句の表現は句意にぴったりとしている。

午前二時子等に氣兼ねの戸を叩く
あいき
隣の戸を叩く音から目がさえる

やけに叩き近所の方が目をさまし
亜也

門叩く音に安堵の腹が立ち
花子

隣りから裏も叩けと首を出し
柳太

四句目の安堵の腹が立ちという微妙な心の動きがよく描かれてゐる。隣りからの句は落語でも聞いているようで面白い句である。

ノックする前のも一度身づくろい
徹也

恋人の居る部屋なのかも知れないし、上役の室へ入る前なのかも知れない。どっちにしても若い心の動きをとらえていると思ふ。

叩いても反応のない地藏さま
八郎

仏壇を開けると孫が鉦叩く
専翁

お隣りのうちわ太鼓で今朝も明け
与志

寒修業叩く太鼓に乗るリズム
繁太郎

この四句は仏様に関係のあるものばかり。智慧のないやつが減らず口たたき
雅城

電化して無駄口叩く時間出来
春雄

減らず口の句は、智慧のない奴という語がいけないと思ふ。その通りであつてもそれを奥に秘めてほしいものだ。電化の句には穿ち味を感じることが出来る。

掃除器も埃り叩きも要る掃除
三時

要る掃除というのは説明調になつて思ふのである世帯に要る生活というようにしたい。

春らんまん車窓叩いて語達まれ
静水

夏期講座車窓叩かれて目を覚し
初穂

川柳たましま誌齡

百号記念大会ご案内

とき 昭和四十一年六月十二日 午後一時

ところ 玉島市港町 水谷会館

兼題 「レール」「内緒」「謎」

選者 「弱点」「相談」「決定」

大森風来子 逸見灯竿 服部

十九年 本田恵二朗 浜田久米

雄 篠原北斗

会費 出席 投句とも 一百円

投句メ切 六月八日

投句先 玉島市新樋 小幡里風

大男黙って机につきおり
 思い出したひょうしに膝を叩く癖
 ライバルに肩を叩いていたわられ
 思い切り叩いて置いてのぞき込み
 雨洩りの滴が叩くリズムミカル
 叩かれる頭散髪もう仕上げ
 明治生れ宿の女中へ手を叩き
 ぶつ真似まで派手に新婚肩を寄せ
 叩いても呼んでも起きぬ妻の意地
 叩かれることを覚悟の意地を張り
 叩くだけ叩いて置いてまだ思案
 奥様に言いますわよと叩かれる
 叩かれてマダム本気でほれなおし
 肩一つ叩きなじみにするマダム
 恋はよし背中を叩く仕草にも
 合格よ肩叩かれた掲示板
 だしぬけに貧しい肩を叩かれる
 任しとけと肩を叩いて言ったきり
 やわらかな言葉は叩くよりこたえ
 母ちゃんは口で童心叩く春
 叩かれた頬に残っているぬくみ
 あちらでもお尻叩くで論はけり
 青尻を叩く親爺の愛のむち
 子のあすへ撫でてやりたい掌で叩く
 人の頬叩き反省してる宵
 約束の数でとまった肩叩き

正直 初市 千代 露声 旭峰 露芳 雄声 静観堂 緑朗 白汀 みよ 正朗 要次 千梢 痴亭 凡九郎 隆史 旭峰 八郎 弘朗 辰始 明子 湖平 釣月 安彦 松風 千夏

ほめられて順を争う肩叩き
 母の肩叩き故郷の日向ぼこ
 肩叩く娘が白髪見つけ出し
 肩トントン終りの一つだけこたえ
 客の前つまむおててを叩かれる
 叩き洗い河内にふるき韓国人
 紙数が尽きたので書けないことをお詫びし
 て最後にお知らせ申上げたいのは、八月号に
 発表の研究題を以てこの作句教室を交替する
 ことになりました。川雅入門講座以来七年の
 間多大の御支援を賜りましたことは本当に有
 難いことでした厚く御礼申上げます。編集の
 ことにも力を入れねばならないし、今の状態
 では身体がつかれそうなので助けを求めたの
 です。幸いに菊沢小松園氏が快く引受けて下
 さったので、喜んで居ります。詳しくは次号
 でお知らせ致すつもりですからよろしく。
 八月号発表・締切六月二十日
 研究題「ボスト」 五句以内
 宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四
 清水 白 柳
 九月号発表・締切七月二十日
 研究題「引く」 五句以内
 宛先 大阪市阿倍野区王子町三丁目三四
 菊沢小松園
 ★ 菊沢小松園氏は「作句教室」を「初歩教室」

(仮題)にしたいと抱負の一端をのべておられ
 れます。初歩の方の指導に全力をかたむける
 決意がうかがわれ、読者諸氏とともに編集部
 も大きく期待しております。——編集部

「川柳雑誌」無代進呈

「川柳雑誌」を無代で同好者諸氏に進呈し
 たいと、麻生霞乃先生からおたよりをいただ
 きました。

皆さんの中であの年のあの号を失ったとお
 っしゃる方もあるとおもいます。こちらでそ
 のご希望の号があるかないか調べないとわか
 りませんが、もしあれば送費として十円切手
 一枚お送り願えば川柳塔社でお世話いたし
 ます。

「川柳初篇研究」がでている号はほとん
 どないそうですが、かなり旧号があるのとこ
 とです。

七月の「路郎忌一周年」を記念して、霞乃
 先生からありがたいお申出がありましたので
 早くお申し込みください。発送は七月になり
 ますが、お問合わせなどは返信料つきでお願
 いいたします。

申込所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社

大 役

高崎雄声選

大役のつもり祝詞を代読し 章雅
大役を袍につめて羽田降り 井蛙
方言もまじえ大役支持を受け 無聖
大役は家も女房も子も忘れ 魚山
大役へ影の力となった酒 庸佑
大役も産んでしまえば当り前 湖平
流感の余波大役が廻って来 信二
大役へ嫌とは言えぬ借りが 奇童
大役に足がしびれた目出度い 代仕男
大役を美貌でこなすお富士 亜也
重すぎる荷ですよとうれしが ろ亭
大役はマル秘の書類運ぶだけ 保夫
大役を果し意外な敵が出来 静水
日の丸を射通し後世名を残 藤波
みな嫁ぎ大役すんで急にふ 醉夢
大役へ自信過剰の太い眉 芳仙
新聞へ長々と帰国談 宗太郎
大役へ次の栄進かけている 義英
パママの見栄に大役背負われ 洋敏
大役と知るか知らずか勘九郎 李朋
恋仲をさく役うけて身を削り 野迷路
毒舌が取得で大役果して来 秀峰

弱ったなあどつちの面子も立役 不水
返済を延す大役妻のもの 千翁
大役のセリフを坊や寝床でも 寿美司
大役を算盤玉が妥協せず 要次
ふところのいいへ大役おしつゝ 恵二朗
無事に終えた大役頭痛だけ残り 千久良
大役なのに男児がほしい夫の慾 芳子
学級委員子の大役へ母自慢 清泉
大役は一つあつてこうて出る 露声
今夜だけ金庫の鍵をまかされる 旭峯
大役は先ず犬にして宇宙船 春雄
大役へ針さすような嫉妬の目 虹要
大役も内助の功で無事果し 秋星
大役へ師は激励の詩を贈り 十九平
町長と言う大役を父子二代 七面山
佳
ハットした事も大役見せず無事 古方
大役は飲ませて麻雀負けるだけ 保夫
おっぱいが育児の大役日々つとめ 句楽坊
大役を果す吹雪の昭和基地 千舟
出嫁きの夫待ち黙々鎌を振り 瑞枝
人
大役を断わる顔にある末練 千代
地
大役をねぎらうように産声よ 凡九郎
天
瘦身に漁民の生活負って飛び 花子
軸

反対党の鋭鋒うけて立つ総理

雨

桜川不水選

雨の日もこらえて呉れぬ手形なり 木魚
迎え傘抱いて待ってた妻の冷え 千代
満開の桜へ憎いにくい雨 藤波
借金工面もつかず雨つづき 専翁
お隣りもラッパと泣声雨つづき 隆子
物十しがハズを呼んでる俄雨 井蛙
科学の世にも雨はどうにもなる 雄声
ドシャ降りに月形半平云うとれず 弘朗
雨降らぬまじないに傘もって出る 野迷路
折角の合傘雨がもう上り 芳子
トタン屋根雨の報告して呉れる 露声
遠足が予報の雨へだだをこね 清泉
雨を待ち雨におびえて雨に泣く 明子
失恋のハートを濡らす粉糖雨 七面山
土砂降りへお地藏さんの無表情 代仕男
俄雨片袖ぬらす厚意受け 無聖
半平太気取京都で雨に濡れ 勝子
何のその花見へ傘をさしてゆき 愛鳩
雨の中捨てた仔犬が戻って来 李羅
田原坂歴史を偲ぶ雨に濡れ 母李
雨上りひよこがみみずふと見つけ 恵二朗

雨やんで新しい傘忘れて来 露声
花盛り雨日直へ小気味よし 旭峯
雨雲とかけつこうする田舎道 破天
低地帯雨にうらみは多々ござる 忠雄
洗面器待機している雨の音 どんたく
雨の日を蝶は飛べないことを知り 幽谷
パチンコに投資させてる俄か雨 春雄
から傘で受ける夕立勇ましい 十九平
俄か雨えたりと馳けもパチンコ店 亜也
又来いとはかりの傘を貸してくれ 春己
終電をむつりと待つ迎え傘 章雅
タノモシで来た湯の街は降り続き 酔夢
住
強引に二人を結びつけた雨 奇童
見送りの晴着縮まずにわか雨 瑞枝
雨もりへたら座敷へ来て座り 正朗
土砂降りにいよいよ怒る鬼瓦 要次
絶讃の雨スコールのように消え 芳仙
雨だれへ猫が一瞬身構える 可住
トタン屋根から夕立が晴れ上り 宗太郎
湖を渡れと虹の雨上り 代仕男
雨宿りここには吊し柿があり 千翁
下宿代値切ってこも雨が漏り 秀峰
人
春の雨コート線になる蛇の口 古方
地
雨雲のすそをめぐって日がのぞき 句楽坊
天

母 校

市場 没食子 選

雨情などそろそろ靴がしゅんでと 古方
袖
一本の傘で愉快な君と僕
外交員母校のうわさ持ってくる 明子
校長と渾名で笑う郷土入り 不水
校章を誇りわたしを励まさん 千翁
イメージをこわし母校のビル工事 千代
母校から招待金の要る話 井蛙
あの教師まだ頑張っている母校 信二
新聞の副産校となる母校 奇童
寄附順に母校の会報のせてあり 亭
改築を急ぐ母校を見て通り 代仕男
鉄筋に変わ恩師もいぬ母校 勝子
我母校昔のままの零地帯 春己
不逞の徒ひとり汚す母校の名 専翁
記念樹がこんなになった同窓会 どんたく
奉安庫はこの辺にあった母校 愛鳩
甲子園の土を母校へ持ち帰り 芳仙
陽春の光をあびてサヨナラ母校 歌子
母校の名又履歴書へ書く不運 凡九郎
彼ついに母校の校長さんになり 恵二朗
学園も出来ず母校のたよりなき 洋敏

母校を恋々「愛しちゃったのよ」 李羅
学園があつて母校のありがたし 正朗
旧友と母校を酒の肴にし 花子
ふるさとの温故知信となる母校 白扇
共学となつて母校になじまれず 古心
母校とは満州でした連れもなし 瑞枝
藩校の由緒を母校額に掲げ 百酒
尊徳の像が消えてる我が母校 旭峯
母校から大臣も出たスリも出た 虹要
夕陽赤々と母校の蔭を長くひき 雪男
母として母校をくぐる日の感傷 夢
名将の額を掲げてある母校 雄声
同窓が寄れば母校の歌となり 要次
大臣と同じ母校で登ヶ崎 破天
稼き先までも母校の寄附通知 芳子
紀元節祝った頃の母校かな 十九平
旗色が悪いので母校の名を出さず 文平
国立に併合母校にコネが消え 章雅
母校もろとも沈んでしまった底 古方
修学の列車母校の歌のせて 句楽坊
人
ビケ張つて母校の名誉考えず 千舟
地
優勝を祝す母校の歌が冴え 七面山
天
共学になつて母校の名が変り 宗太郎
軸
旧高卒売けても寝歌なつかしみ

第百八十一回 (新年度第九回)

大萬川柳

兼題 「免許」

入選発表

松原 万 竿
医師免許とったが金にまだならず

宮田 林 東雲楼

いつの間に免許とったかお手伝い

倉吉 弘 朗

引揚げて妻の免許に助けられ

笠岡 遠 二

免許証大切益に手を触れず

大阪 章 雅

保身免許こともが好きで嫁さぐれ

布 留 清 人

歩行者の方にも施きたい免許制

石川 宗 太 郎

免許証に格あり日本住みにくし

高 槻 静 馬

免許証と車のカタログ持って嫁き

大阪 小 松 園

てっちりへ免許の腕を信じきり

岡山 要 次

気まぐれにとった免許の世話に

出 雲 李 朋

人生をここで出直す免許とる

無免許のあとから走る霊柩車

免許証指名手配に似た写真

大阪 形 水

實力のほどはどうでもよい免許

岡山 一 声

玉造川柳会

服部緑地吟行

時 六月十二日 (日)

阪急前 九時半集合

題 光・峰・腹痛

(吟行 雑詠)

免許証へそくり入れたまま落し
免許証とれば保険をすめられ

奈良 凡 茶

免許証も仲よく理髪師の夫婦
無免許と言わず彼女を横に乗せ

大阪 水 客

レンタカー妻の免許に頼りきり
定年へ妻の免許がものを云う

奈良 十 梧

たこ焼きのおっさん薬剤師やうな
火夫免許余生を火葬場で送り

神戸 どんたく

子の免許母に苦労がまた一つ
免許証追いかけて来て乗せたらか

富田 美 房

プライバシー用に社長も免許とり
職人をみな技術者にした免許

和歌山 木 魚

免許証妻に心配ごとが殖え
予期しないことで免許が生かされる

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉
南河内 吸 江

免許もうとうに小型もまだ買えず
呉 魁 光

無免許の腕お巡りを見のがさず
大阪 露 声

あたま金だけの車へ新免許
香川 醉 夢

免許とってから余分な仕事ふえ
岡山 文 平

免許状集めてミスのままで居る
山口 弘 道

婚期もう逸して免許だけ残り
泉 大 津 徹 也

無免許で飲酒仏も浮かばれず
大阪 琴 女

いろいろと免許をもっておちろす
堺 一 舟

一としんしょう賭博師に免許
藤 山 可 住

免許証はほんとの齢を書き込まれ
大阪 弓 彦

無免許でスイスイと世を渡り
岡山 藤 波

免許証持つ子の帰えり母は案じ
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

免許なくとも人間国宝に推され
大阪 双 葉

自働車は盗品他人の免許証
岡山 藤 波

大阪柳志

免許証社費で取らせば引きぬかれ
軽免も持って嫁く気の庶務で老け

笠岡桃里

黒帯の婦警を私服で出すおとり
白タクを始める定年の免許証

岸和田きさ子

無免許がばれて技術が惜しまれる
免許まだまだきびしい難市で続く

兄島恵二朗

免許皆伝とはパチンコのまじった
とりたての免許鎮静剤を飲み

はやはやの免許へ道が狭ますぎる

大阪梅里

免許証へ口をそろえて止めという
とりたての免許へ保険かけてから

名人に免許は要らぬ文化財

五客

泉北好郎

免許証忘れたときにひっかかり

布應清人

離婚して看護婦免許が役に立ち

大阪柳志

お茶お花空手軽免まだ嫁かず

香川酔夢

無免許の弱味示談にしてとられ

大阪金三

副業に免許の妻が弟子をとり

人ノ句

米子千代

脛かじるうちに免許も取っておき

地ノ句

界一舟

食いはぐれない免許持ち働かず

天ノ句

大阪明子

いつ免許とったと念を押して乗り

選者吟

一台で免許二人の忙しさ

大萬川柳ベストテン

(五月現在)

雅号ぶっちゃけばなし

しののめろ



かわばた

・川端東雲楼・

(15)

親父は私の十五才の時に酒で死
んだが親父の酒はよい酒であつ
た。酔えば出る「何をくよくよ川端柳」。歳月が
流れて三十才当時時事新報の新春川柳懸賞募集。
道者岸本水府、に投句した時の雅号。フト浮んだ
東雲節、昔遊女でさえも待遇改善のストで客を拒
否した意気、川端と川柳、とっておきの「東雲
楼」これが何と一等賞、爾来四十幾年私の川柳は
哀れ三角形の底辺を低迷の一途。富柳会で恩師好
郎先生の句風を「一刀両断型のきびしさ」摩天郎
先生を「典型的の円満型」と感想を申上げて先生
方を苦笑せしめた東雲楼でもある。早逝した朗か
村長の倅、東雲楼はすでに七十二歳？時々思慕追
憶の願想にふけることもある。

無職・明治二十六年生

橘高薫風著

句集「れもん」

定価 500円 (送料共)

一	水客	二四、〇	大阪
二	柳志	二三、〇	大阪
三	梅里	二一、五	大阪
四	吸江	一九、〇	南河内
五	好郎	一七、五	泉北
六	清人	一七、五	布應
七	美房	一六、五	富田林
八	万竿	一五、五	松原
九	可住	一五、五	藤山
一〇	木魚	一五、〇	和歌山
一一	桃里	一五、五	岡
一二	阿茶	一五、五	大阪
一三	恵二朗	一五、五	島
一四	凡茶	一五、五	奈良
一五	痴亭	一五、〇	大阪
一六	没食子	一五、〇	大阪
一七	静馬	一五、〇	岸和田
一八	宗太郎	一五、〇	高槻
一九	文秋	一五、〇	大阪
二〇	以下略		

次きの兼題「臺」

発表 六月二十日

六月の兼題「腕」 五句以内

締切 六月二十五日

発表 七月二十日

投句先 大阪市阿倍野区松崎町

三ノ一〇 大萬川柳会

柳 界

展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

☆ふあうすと誌の雑詠「明鏡府」欄が従来の隔月自選を毎月自選にふみきった。同志四月号巻頭言で橋本言

康を回復、一時間程の散歩に体調を整えておられ、日焼けしたお顔も元氣ぞうだった。

也氏は「川柳界の現時点に於て同人誌としての本誌の本欄が自選に制度を変えたことは今後の川柳の在りかたを思うとき、あながち無意義ではなからうとも思える。編集部を試みとしての本制度に應え、各自のペー

氏がこれに当る。

野心作等をためらうことなく発表して見るのもいい勉強ではなからうか。ただし放従、無軌道に流れないよう

☆「福永清造かんれきおめでとの集い」は六月四日

判にも耐え得る心構えが肝要である」と自戒をうながしている。

☆京都市左京区栗田口鳥居町二六東山会館で開催、

☆葭乃先生(奈良県)は暖かなるに従い、ぐんぐん健

吟(短冊)を持参のこと。

☆清水口柳氏(大阪府)は突然の所用で車を走らせて五月三日福岡市へ。用事をすませて博多どんたくを見物、四日は有明フェリーで島原へ渡り、雲仙から長崎を見物されたが、時間上追われてのスケジュールに川柳家と交歓が出来ずに残念であった由。

☆米沢暁明氏(大洲市)は「花吹雪なんの未練もない姿」と在職三十七年の教育界を引退され、故郷の自然を友として余生を静かに送られることになった「天地有情雲を見よ水を見よ」

☆羽原静歩氏(守口市)は守口市立第一中学校を退職公職は去られたが、これまでに教育界で得た経験を生かして新しい幼児教育を実践したいと。

☆金井文秋氏(大阪市)は五月六日の本杜句会の日、第三番目の令孫を得られ、しかも男児なので目を細めていられる。

☆本田恵三朗氏(児島市)は児島南科川柳グルッペの生みの親であるが、他方、

同氏所属の鷺羽ライオンズクラブにも漸次川柳を浸透させておられ、クラブ誌に川柳を掲載、この新春号の表紙は氏の作品を前衛書家の三宅素峰氏が染筆されたもので飾られた由。

☆藤井明朗氏(島根県)は木次町役場衛生係を定年退職された。これからは、松江司法書士会土地家屋調査士会木次支部事務局に勤務される。

☆辻川喜仙氏(大阪市)から「生々庵主幹には故豆秋氏の葬儀以来お会いしておりません。最近殊に目の不自由から外出を致さずにおりますのでご無沙汰を重ねていますが川柳塔の発展に心から喜びを感じております。」

☆渡辺曉童氏(愛媛県)は五月十日、静岡市で開催される日本広報協会主催、第三回全国広報研究大会で、功労者として表彰された。

☆弘津柳慶氏(防府市)は山口県防府市新前町日本専売公社防府製塩試験場管理課へ転勤された。

☆植村客遊子氏(神戸市)は二月十五日から国鉄姫路第二機関区へ転勤。

☆若柳潮花氏(高槻市)は五月八日大阪北の産経ホールで「千代の友鶴」を舞わせた。日舞の師匠に専念さ

六月の句会

南海電鉄川柳会

時 十六日(木)

題 手数料・誤算・い

所 ナンバ高梨下

新和クラブ

南大阪川柳会

時 二十日(月)午後六時

題 切り抜き・イメージ

所 アペノ区松崎町三ノ

一〇 大 萬

☆川岡霊眼子氏(諫早市)は四月二十三日、東海近畿地方を夫人同伴で旅行、途中大阪駅から本社へ電話をされ列車の時間の都合で会えないが、葭乃先生や生々庵主幹によろしくと、編集部の一三夫氏と声の対面をされた。

☆五月十日、静岡市で開催される日本広報協会主催、第三回全国広報研究大会で、功労者として表彰された。

☆弘津柳慶氏(防府市)は山口県防府市新前町日本専売公社防府製塩試験場管理課へ転勤された。

☆植村客遊子氏(神戸市)は二月十五日から国鉄姫路第二機関区へ転勤。

☆若柳潮花氏(高槻市)は五月八日大阪北の産経ホールで「千代の友鶴」を舞わせた。日舞の師匠に専念さ

れてからの精進のためものとは云え、梅里、梅志、竹荪、一三夫、操子、きき子千鶴、蕨風諸氏の観覧者に感銘を与えられた。会場には久方ぶりに紫香氏の顔も見られた。

☆堀江正朗、石田清泉両氏（鳥根県）から、「正本水客先生が観桜句会に木次へお出でになり、先生の温客に接して大変嬉しく存じました。」

☆国弘平休氏（下関市）は川柳塔、小野田川柳会、下関一杯水、宇部の五平太と欠かさず投句、小野田川柳会の研修室を担当して執筆、「昔云ったようなことを繰返して初心者の指導に当たっていますが、そのうちに川柳塔に入会して貰い仲びる芽は大きい畑に移したいものと思っています。」と。

☆榎田竹林氏（静岡市）は静岡市太田町四六へ転居。☆傍島静馬氏（高槻市）の住所が左記の通り改称になった。高槻市藤の里町四番六号。

☆杉田敏正氏（池田市）は池田市石橋一丁目一七の一

七の新居へ。

☆川上三太郎單語集「この道」はさきに本誌でも紹介したが、大野風太郎編の單語百十数編。「技巧としては飾る事ではない、むしろ飾らぬ事、若しくは飾ってはならぬ事である」「あらかたの句会では、始まる前に終つていける——」五百部限定、定価千円。

☆野田昭夫著「人間の辞典（愛から別れまで）」が東京都文京区高田豊川町法書院から発行になった。現代の川柳多数を掲載、騒しして人間の喜怒哀楽を浮き彫りにしている。番傘系の作



大田原経典「千代の友誼」を語る若御潮花氏。（薫風うつつ）

☆河相すゑ氏（西宮市）は、四月十七日に出張で上京、学者、役人との会合の後、武蔵庵（故郷三味氏居）でくつろがれた。三月で五月三日に再度上京、高須三味追悼句会に出席、全国各地からの出席者と交歓された。

☆山田季替氏（高槻市）も三味追悼句会に新幹線を利用して日帰りの出席、故郷の生前、新大阪駅で来阪を迎えた当時を偲べた。☆山田路閑古氏（東京都）は「西行祭歌詠」の俳句を他の五氏とともに選をされた。なお氏が発行されている

家の句が主体に取り入れられていて、三百二十円、送料八十円。

「散歩」は執筆、校正、製本、発送と全部ご自分の手になるものである。同氏

の住所変更「東京都田区石川町一丁目八番一ノ四〇五」。

☆川端東雲樓氏（大阪府）夫人が去る二月十三日夕刻逝去されたが、日ごろは東雲樓氏よりご壮健だったそうである。「けさもまた心うつるな庭にたち」と心境を句にたくされ、路郎先生がお亡くなり霞乃先生のおさびさがよくわかります。

☆傍島静馬氏（高槻市）と吉田圭井堂氏（堺市）は「砂丘俳画展」へ麗筆をふるわれた。五月一日〜三日・大阪・朝日文化ホールで好評。

☆服部十九平氏（岡山県）は四月下旬沖繩から、37年7月号の「川維」へ「沖繩と川柳」を執筆した当時を思い起し、路郎先生と霞乃先生に岡山から電話されたことに今は感無量とのこと。

☆長野井蛙氏（防府市）は長い間の病院生活から四月に退院されたが、大手術とご老齢のため衰弱がはなはだしく目下自宅で静養中。ご全快を祈る。

☆高峰柳児氏（須賀市）は昭和倉庫（株）に四十年余勤められたが、このほど定年退職され「かこちいるしじまへ春の陽がなびき」の句を寄せられた。

☆二田一三夫氏（大阪府）は芸能三賞に輝く若井はんじ・けんじ両氏を祝って漫才台本を執筆。NHK第一放送「上方寄席」五月二十五日午後7時30分放送。なお一三夫氏宅に電話開通し、七一八・三二一八番。

☆藤原秋月氏（岡山県）は消防団の一行と小豆島へ行かれ、同地で偶然に別の団体に浜田久米雄氏ら柳友三名と会い楽しい旅をされた。★サンクラスで見た新緑は既に秋。

☆池田麗進師（本社句会々場、自安寺）の母堂池田いわさん（93歳）が四月二十四日ご他界、謹悼。

☆橋高蕨風（大阪）は五月一日から水郷（潮来）犬吠埼へ遊び、生前水郷を案内すると、しきりにお誘いを受けていた三味氏の願福を祈りながら一人旅を味わって来た。

きのう きょう

本多柳志

◇わたしのもっているユーモア辞典に、こんな一節がある。

(社長訓) 社長「わが社員は、すべからく、ユーモアを解さなくてはいかん。冗談の一つも判らないような者は、物の役に立たん」そう言つたとたん、社員一同、口をそろえて「アハハハハ」

これををよんで可笑一番しないような人はユーモアの何たるかを、解していない人であつて、共に川柳を語る資格の、ない人である。

◇牛肉や牛乳が私達の、生活の中に入りこんで来たのは、そう古い事ではない。せいぜい五十年位のことである。今では牛肉や牛乳は当り前のことであつて、用いない方がおかしい位であるが、勿論栄養もあり、おいしかったからではあるが、其のおいしいものをまつ先に、取り入れたのが老人ではなかったの当时的所謂若いもの達であつた。

若いものと云えばこの頃は、猫も杓子もエ

レキである。モンキーダンスである。老人や若くても頭の古い連中からは、若いもんはどうかしている。あんなもんにつつつをぬかしては、今に国を亡ぼすんじゃないか。自分の古さに気がつかずに、大げさに驚いているようだが。

◇若い人達がまず取り入れて、はじめのうちは、あんなもんと云つていた老人達も、段々と馴れてしまい、目に見えない早さで、私達のくらしや世の中が進んで行くのではなからうか。この進歩的な若いものが、見向きもされないものに、川柳と政治がある。

七十、八十の老人達に、勝手気ままにされている政治。手に負えない事には善処します。行きつまつたら辞職します。全く愚劣な話ではないか。

年毎に平均年令の、老化して行く川柳界も又頭痛の種である。若いもんよ、何とかならんものか。

又上る今日の物価へ明日閣議

処世片言

唐崎専翁

☆現世に於ける人間に最も尊いものは空と無

—も一つ貴いものは現実。

☆無約定は否定、未知数、無限、約定は肯定拘束、制限。☆笑いと涙と言葉は、神が人間への特配にして且つ神人合致の証左。

☆笑うて世に処す人は、最も幸福であり、心から笑ひ得る人は神に近い。

☆陽粒子と陰電子は宇宙の原動力、男性と女性に依る人間は社会の原動力。

☆夢を見る動物、幻に生きる動物、笑と涙と言語を解する動物、是れ人間なり。

☆人間に宿る靈魂の囁き、それは詩である人間は詩をつくり詩は人間をつくる。

新同人紹介

名古屋市中千種区親町一ノ二

吉田水車

—白柳、いわを推薦

★

☆戸田古方氏(豊中市)の長男陽一氏は松尾景子さんと五月十一日新阪急ホテルで結婚式を挙げられた。中島生々庵主幹も出席されお祝いのべられた。

☆山川阿茶さん(大阪市)の古稀を祝つて多くの川柳家が祝吟をおくられた。

本社五月旬会

会場・自安寺

六日午後六時



飛び石連休あけだけに出席率を心配したが番傘の木幡村雲、丹波太路両氏らのご出席もあり、おかげで盛会でありがたかった。

披露に先きだつて吉田圭井堂氏の柳話があり会場は完全に氏のペースに巻きこまれてしまった。三十二年前の氏の令息の交通事故の実話だけに真実は聞く人たちの胸を打ち、しかも当時の事故現場を図で示めされ、この話の中に登場する検事の推理など、まったくの清張ばりの小説そのままに、スリルと迫力の連続で正に圭井堂氏の話術の妙に魅せられた四十分間であった。

(河井庸佑整理)

出席―与呂志・一三夫・白溪子・よしを・静馬・葛城・加仙・双楽・誓二・いさむ・庸佑・好郎・一栄・昇・圭井堂・花梢・すみれ

・太路・古方・露芳・舟遊・愛論・専翁・照一・村雲・竹荘・白柳・野迷路・水客・滋雀・痴亭・柳宏子・吸江・あきら・甘草・一舟・六童子・恒明・トメ子・弥生・小松園・静歩・美房・多蘭子・凡九郎・千梢・形水・金三・梅里・春己・凡吉・良夫・生々庵・八郎・文秋・清人・季賛・有子・たつみ・葉子

席題「コンビ」

小川恒明選

けんかしたらコンビのトチリ
弥次喜多を手本に楽し旅終わる
そのコンビもう満場が笑ろて待ち
老コンビ明治の頃をなつかしみ
一言も言わんがコンビ意が通じ
名コンビしばし拍手が鳴りやまず
気の合ったコンビで回る梯子酒
別れても夫婦善哉名コンビ
行き詰まるたびにコンビをかき
コンビふとライバル意識になる人気
顔色の奥をコンビは読んでくれ
コンビ組みたてらしくまがあわす
大学のコンビがプロで敵味方
いちたすいちゃんの力とコンビ
コンビ解消互いに成長した心算り
名コンビ師匠をもったいなく叩き
名コンビすぐにおかしな仲にされ
新コンビ成長株と言うところ

席題「故障」

木幡村雲選

飛石に役所の時計も修理中
蝶番あちこち利かぬ年令になり
テレビも二度とは買わぬ特価品
延着の理由故障の手は古い
安い筈セコハン翌日もう故障
大時計顔へ故障の紙はられ
故障車の徐行みんなの眼が送る
故障したマイク鼻から抜けた声
故障して電話十円損をする
かきわけて乗って座れば故障です
テレビ故障気の抜けている座敷
そこら中故障だらけにサロソパス
せまい道故障車二台続いてい
遅刻しそうなのに故障車となり
父さんでなおりでもない故障なり
故障の個所判らずじまいで動き出し
よう止まる時計を伊達に持ちあ
たまに來たバスは故障の回送車
アフターサービスも時分に故障
アイロンの故障ぐらいいはなおす妻
故障車に赤ランプがハイウェイ
よく入りそうな故障のパチンコ台
春のどか駅の時計がうごかない
更年期障害妻はもう悪るびれず
故障した單車を押して行く若さ
まだ月賦すまぬ内から故障する
きまぐれのラジオ叩けば音を出し
素人がいじくり故障こじらせる

加仙 静馬 痴亭 梅里 圭井堂 文秋 水客 葛城 白柳 庸佑 いさむ 千梢 滋雀 与呂志 生々庵 静馬 柳宏子 庸佑 すみれ いさむ 清人 舟遊 吸江 一三夫 柳宏子 露芳 村雲

席題「真ん中」

正本水客選

真ん中の一人が唄うヨイトマケ
真ん中の客からあぐらに座りかえ
真ん中にはさみボーズを交へ見る
大阪の真ん中へんに僕の家の
不肖の子兩親の真ん中に座らされ
ラッシュアワー真ん中の方から降りよう
真ん中へ一人の女を泳がせる
同心円のその真ん中に何を描こ
真ん中に座り合ひいそがしく
真ん中の米寿へピント合つていた
真ん中を行けど頑固をいさめられ
真ん中にはげてる人がここにも居
真ん中に当たると久寿玉開く仕組
姉妹に狹まれ長男ひ弱なり
真ん中は静かに波紋広がりぬ
真ん中をわらうとそれる銃のくせ
トラックの真ん中すも嫁の荷をさぐ
まん中はよしあしにつけ叱られる
真ん中をまともに打たれさような
つな渡りまん中へ来て向きを変え
真ん中に押し出されて二人照れ
まん中に私を置いて考える
真ん中に鼻がついてる人の顔
真ん中へ日の丸入れて世界博
円心に居てめったな事出来ず
真ん中の笑顔は日本晴の顔
噴水の真ん中へんに陽が当る

愛論 白漢子 季賛 照一 多蘭子 舟遊 古方 一栄 古方 圭井堂 甘草 金三 静馬 舟遊 村雲 好郎 梅里 圭井堂 白柳 誓二 六童子 多蘭子 よしを 太路 いさむ 水客

兼題「デラックス」

西田 柳宏子選

デラックス国の親には気に入らず
デラックス夫の月給ふと思ひ
豪華なる料理も芋は芋の味
職医今キヤデラックで来た犬を診
全集がざつしり書架のデラックス
ビフテキがこんき厚いデラックス
税吸いあどデラックス庁舎落成し
デラックスな応接土産を出しそ
キャバレーの夜見えデラックス
デラックスに慣れて素朴の良忘る
デラックスの特価へ我が家手が出ず
デラックス庁舎で市政はかどらず
コマリシャルなでんもデラックス
デラックス店舗に古い置時計
デラックスの道具汚職の証拠たて
銭のない人ほど豪華な夢に酔い
デラックスな晴着はカラーに写さる
すぐ離婚するのに一式式にかけ
デラックスボディの色がちがう
デラックスをねらうばいほめて去に
外車借り一日だけのデラックス
デラックス追わず素直な子に育て
家具だはデラックスなベニヤ張り
デラックスな旅館で迷子になろう
デラックスのビルが虫古都のさ
デラックス何を食っても落付かず
デラックス這入ると足が滑りそう

小松園 好郎 どんたく 中性尼 村雲 照一 痴亭 愛論 吸江 静馬 季賛 美房 一三夫 昭三 專翁 金三 竹莊 一三夫 旅風 潮花 時子 静馬 白柳 一栄 好郎 よしを 金三

デラックスなケキ目出度と手切
二十万トシ港を圧す豪華船
デラックス家が買えそな武者人形
経営は三國人かデラックス
デラックスな嫁荷へ近所目を集め
大和路に古代日本のデラックス
デラックスばやりで古淡な宿消
デラックスムード月賦と縁切れず
夢だけは誰れにも負へデラックス
ゼロの数読んで溜息ついている
年令の差はデラックス感じない
倒産の相談デラックスな社長室
国訛りの障に大阪のデラックス
デラックスな家建ても百姓の顔
誕生日心ばかりのデラックス
デラックス流行りへ超の字で足さず

舟遊 村雲 春己 好郎 六童子 生々庵 一三夫 静馬 よしを どんたく 白柳 生々庵 六童子 一栄 金三 柳宏子

兼題「不器用」

森下 愛論選

不器用でも金銭は器用に使つち
棚ぐらいつれると不器用で立腹
不器用にならんだ文字筆が泣く
処世術わしや不器用と野にかくれ
不器用を共に笑える妻があり
不器用な娘が優良児童み列べ
器用でもないのに食之付きまとい
不器用に日本の味を箸でとり
不器用も出来まず手品種を見せ
不器用でよし無事故のなっぱ服
形水 露芳 滋雀 專翁 中性尼 句楽坊 舟遊 恒明 誓二

不器用な字に真実のあるレター
器用食乏ざりとて不器用も時々
生来の不器用年季まだ明けず
ええ何うせ私は不器用ですと妻
言ひ訳が尻からはげば不器用さ
無器用な字が消しゴムにいたわ
不器用が一つに打ちこむおそろし
不器用なくせに口だけよくしや
垢抜けのせめ不器用なアツブリケ
釘を打つパバ赤チン待機させ
不器用な手付で初めて抱く我が子
ヒネくって切つてハツミイビツじ
不器用に見えて器用な左利き
不器用に見えて器用な左利き
指は打つ釘は曲るは板割れる
不器用やナアと嬉しく世話をやき
不器用ですわと女は又姪み

兼題「動物園」

戸田古方選

美房 一三天 昇 六童子 圭井堂 昭三 一三夫 竹莊 太路 金三 よしを 村雲 葛城 旅風 柳宏子 愛論

動物園ワニは動かぬものらしく
春眠はここにもあった動物園
動物園眼の美しき獣たち
動物園子なし夫婦のはしやきよう
泥鰌に生まれ動物園で果て
動物園人間みんな同じ顔
錦蛇いっぺん動いて見せてんか
動物園出てから覗く亀の池
めおと猿蚤とり合つて日和ぼこ
チンパンジーつい本能の手で食
ライオンのあくびレジャーをせ
鉄柵の外は大人の動物園
ライオンの昼寝人間駄法螺ふく
動物も不愛想雨の動物園
淑やかな抵抗動物園の獅子
風も野性にもどる夜の動物園
虎の声ひびき閉園間近なる
アシカもう閉園という声になる
仰向いて麒麟よだれを受けとめる
狼が鳥親子の情を見せられる
猿になって猿を見ている猿が鳥

兼題「深い」

川村好郎選

潮花 章雅 どんたく 葉子 好郎 静馬 加仙 滋雀 静歩 水客 あきら 柳宏子 生々庵 水客 柳宏子 水客 野迷路 春己 古方 晴子 旅風 若芽 鶴丸 湖平

デモ参加深い考え持ちもせず
愛の深さを知った夜空の星きれ
交際をする程奥の深い人
深入りのしよっぱな株でちと儲け
暴力団荷に似た根の深さ
愛情の深さ確かめ合うしつと
井戸の深さに花も散りこまぜ
深入りと判り乍らも意地があり
深甚の感謝へたった紙一枚
人情の深さ底辺で泣かされる
女ひとり生きるに深いわけがあり
美顔術してもものびない深いしわ
求人難深い事情は聞かず探り
深い仲の女が交通事故で曝れ
モナリザの笑みの深さに似し君の
昇格の椅子へ深く深く掛け
深いわけみなまで聞かず貸して
意見もう馬耳東風の深い仲
深い皺きざんで人間国宝生き
深入りを今更悔む胎児の始末
見送って深い人とは思わせず
愛情の深さ親になって知り
土壇場で思慮の深さを見直され
ひも付と知らずばんばん深くなり
深い訳も知らぬ世話焼きもて余し
岡崎きをされてだんだん深うなり

(九時閉会)

千夏 弥生 加仙 圭井堂 吸江 美房 水客 圭井堂 滋雀 一三夫 痴亭 竹莊 梅里 章雅 昭三 静馬 良夫 一三夫 滋雀 水客 春己 小松園 静馬 柳宏子 好郎

老地物語

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

交通局句会 (大阪市) 児島与呂志報

ゆずられた席へよるめく老人
涙もろくなつてしきりに鼻をかみ
今の世を冷評しつつ食える人
商談の人とハシゴの食い倒れ
ボロ着ても口のうるさい食い倒れ
おいそになつてこまかい食い倒れ
食い倒れこんな露路にもめしの店
ノレンから尻のはみ出る食い倒れ
数の子ヘンシヤツボを脱いだ食い倒れ
一匹のネズミへ開けた非常口
非常口の不備を検査でつかれる
招かぬ客非常口から訪れる
非常口近い座席で胸を撫で
青写真先ず非常口を尋ねられ
非常口不便な所で大惨事
十代の非行を指導する婦警
指導され松葉杖で歩いてみ
奥様の指導でパパのダンス熱

緑雨 春巢 凡々 胡蝶 トンチ のぼる 洛酔 我勝 雅万 孤舟 三十四 翠芳 醉升 はじめ ゴーゴー 一乃字 誓二 雅巢

事故防止指導する人される人
指導者の答弁なにか裏があり
下心あつて指導の熱が入り
雑草の威力踏まれたまま新芽
三寒四温新芽伸びたりちぢんだり
スカートを気にして踏台落ちつき
踏台でもう一寸の手が足らず
一生を子の踏台に母老ゆる
食い倒れ大阪に居て元気です
まゝのぼつかり食べてやせつばち
新築へ非常口には気を配り
サービスがべんちやと嫌にな

大鉄川柳会 (大阪市) 辻白漢子報

早合点結局プラン狂わせる
遺族には雪崩れの谷の春遠く
露天風呂男は入口で待たされる
谷川の清湧忘れて街に住む
持越しのバーゲンセール主婦の群
焼酎を寝酒に谷で炭を焼く
早合点されてつじつま合せてる
退院は大安の日まで持ち越され
杉高く茂つて谷へ陽が抜けず
旅からの機嫌が妻にまだ残り

和気川柳会 (岡山県) 藤原秋月報

先約を断りきれぬ義理へ泣き
嫁の荷へもう気の早い乳母車
先約がお得ですよと客つなぎ
金樋も積んで男の子の乳母車
退院のマスクが痛いほど白い

みのる 清山 茶々坊 正則 淡舟 鉄児 六竜子 季賛 浸多郎 清流 与呂志 季賛 求女 初雨 美穂 永断 精二 杜的 白漢子 水客 胡風 三六 秋月 知水

乗り越しの席へライターまで忘れ
先約があつて手ぶらで戻らされ
乳母車押して歩るけば三分咲き
マスクしていても彼女が目が笑い
ライターがあるのにマツチも来
マスクした医者の手際わに運を
おつかない顔に先約押しきられ
旧友にマスクはずして声をかけ
先約を結んで気楽な湯につかり
ライターを出せば慌てているき
世辞一つ添えてマスクを売つて
先約の札をつけたらねがはえ
出しやばりがまた先約をつた返し
ウインドへふつと吐息をつくも春
好きと言う短かい言葉よう言わず
春雨の駅への道を教えられ
トラクター隣の牛が暴れだし
今に見る今に見る言ひ四十過ぎ
ライターを長管の父も持つており

備前川柳社

横山一声報

腹心として一生を地味に生き
人払いして腹心と差向い
腹心と言われて知れた片想い
腹心に聞いて貰つてうさが暗れ
腹心の友が思わぬ恋仇き
腹心と言う名で苦境にも耐える
腹心の妻も猫とはよう告げず
腹心がいて世の中がわかつて来
腹心と呼んで危急の智慧を借り
腹心を得てからボスがなおいばり

文平 寿増 久米雄 一声 正雨 惠平 三馬 左馬 寛子 千代香 白水 伊久野 不朽 藤子 繁子 正堂 伍堂 伶坊 伊久野 正美 君子 一声 文平 静子 英子 秋月

ほんとうの腹心落目が来てわかり
腹心は目で言うことを目で答へ
妄宅にまで腹心は走らされ
腹心がもう出す頃の助け舟
腹心の智恵で倒産支えられ
腹心は云いたいことをもう悟り
腹心の顔二次会へ来て揃い
番犬も尾を振ってくる仲となり
飲んで来た音番犬の方が知り
番犬が吠え夜中に一服し
ふりきつて帰る女の一人言

玉造川柳会

(大阪市)

西出一栄報

チツプした球はベースで渦を巻き
妻の巻くすしの太さを笑い合う
子の顔を順に浮べて買う土産
見馴れない留守番空果と間違われ
図々しい空果留守居になりすまし
連れて来た刑事へ空果みんな吐き
空果から見ればまじないのよう鍵
胸に花つけて会では威張つて
会長選結局暇と顔買われ
横槍が入つて会則また流れ
いささかの抵抗養子会作り
会費不用反つて人が集まらず
役員章しわをのびしてから返す
妻の耳もう会の名など聞かず
社長だけ喋り会議いつかすみ
婆ばかりの会で飲みもし唄いもし
玩具箱四んだ毬が忘れられ
弾力なき肩を揉み合う老夫婦

胡風 三平 正洲 照路 芳月 久米雄 柳風子 しん平 知水 幸仙 三六 井平 白柳 柳太 寿美司 柳宏子 金三 一三 義介 静歩 章雅 天真 古方 凡九郎 好郎 文秋 滋雀 静馬

童心に花を咲かせたクラス会
マツトレス二人座つて買うと決め
校長は伴の非行に青くなり
父ちゃんにも覚え非行責められず
若い子が非行に見える年のずれ
モンキーダンス母は非行の内へ入れ

南大阪川柳会

金井文秋報

下積みの苦労腰抜けでは出来ず
ナガラ族突如振り向きうけ答へ
低姿勢また前借を頼みに来
パートタイムストレスちやうど
割勘と知らず揉み手でよばれて来
ラーメンの汁とばさずテレビ見る
脚線美なのにスカート短くなり
まよりはましとパートタイムでても
実力で這入つてコネへ低姿勢
腰抜けの父腰抜けの子と叱り
線一本切れて都会も闇となり
腰抜けの証拠子を抱きおむつ提げ
ナガラ族味を聞かれて生返事
パートタイム夫に見せぬ別の顔
低姿勢で腹のすわつた返事する
三猿がシェーと洒落そうナガラ族
せつかくのお料理テレビへうの
神経集中したらナガラ族眠り
流行のセンスへちがうが生きてく
パートタイム手不足呼ばるババ
ちぐはぐの徳利でよろしいける口
鍵つ子とパートタイムでホツと

季賛 照一 句念坊 六童子 野菜 あいき 柳宏子 凡九郎 梅里 古方 静馬 小松園 文秋 一栄 柳志 清人 千梢 圭井堂 柳太 痴亭 白柳 金三 あいき 集生 弥生 双楽 八郎 季賛

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

一線を越えぬ仲とは見て呉れず
ちぐはぐな答弁しても金パツジ
腰抜けを承知して嫁く歸三十
パートタイム団地夫人の秘め通い
ナガラ族ラジオ聞かねば仕事せず

滋雀 静歩 野迷路 章雅 喜仙 良夫 草右 愛論 没食子 勝利 夏生 よしを 竹荘

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資会社 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452114
夜間 06 44008

稲穂会 (出雲市) 久家代仕男報

給料は上がれど物価の通り過ぎ
下心ころにもないお世辞言い
お世辞とも知らず子供によく歌い
倅せの中に生きてる洩いお茶
バラツクの寒さを政治に訴える
行商のさも軽そうに荷をかつぎ
引越の荷物に世帯見すかされ
魚臭い荷物が席のローカル車
引越の荷物へ坊や乗せて押し
熱燭が節くれたった手にこぼれ
熱燭がいい常連とうまが合い

むらくも川柳会 (島根県) 藤井明朗報

見送った霧圍気のまま来る公園
又損をする気で円満な線を出し
春風に押されて歩くニューモード
肩書きが泣いてますますという浮世
健康に泣いてから歩く朝の道
事件なし巡査子供とたわむれる
實力の差が肩書を意識せず
友情を裏切るハメになった恋
友情をたしかめ合せて果立つ朝
事故のたび母は歩けというてくれ
肩書に遠慮は出来ぬ司法の手
友情がえつて仇に司法のハンコ
転勤を庭の桜に見送られ
円満なムードに奥様飽きてくる
仮装面あごから食べる花見ずし
天も地も人も酔うてる桜土手

登志緒 佐藤 小竹原 齊兆 保男 須恵吉 芝朗 代仕男 春軒 草丘 緑之助 水客 緑之助 晃男 祥月 明泉 清泉 昌介 みの介 正朗 清夢 鶏生 鯉南 健太郎 澄水 白汀

桜土手町の歴史に咲きはこり
おしやれしてさて荷物は誰が持つ
つましいおとれ白足袋眼にしる

肩書が付き人間味うすくなり
円満に話しましょうと妻有利
人の手も借りて円満とり戻し
子の数は円満さとは別らしい
一歩ずつ無心の門へ足重し
友情の頑張れという保証判
友情の涙真珠に似てこぼれ
痛いこと言う友情に支えられ
友情に甘えてならぬ日の決意
友情の中にも商敵ちゃん居り
友情も義理も金故去つた人
円満をのぞく近所の眼がこわい
友情はうれし落し目になつてから
円満に暮していますと家出の娘
友情を裏切り恋をもつて逃げ
新婚の当座はいずれもご円満

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

通夜の席忘れたはずのひとがおり
夜の街星のあるのを忘れてた
苦学する身に卒業の日が待たれ
全学連声を囁らして卒業し
川の水海へ出るよに卒業し
忘れることにして北風へ一歩二歩
忘れものあるような春の夜デイト
輪などは忘れなさいとおだてられ

祥吉 勇代 一加 一郎 英江 好子 芳華 孝朋 李正 芳夫 房夫 きみえ 一柳子 榮美 俊美 雪丸 代仕男 鶴丸 早苗 晃一 雪一 一人 弥生 集亭 雄峰 草春 吸江

謝恩公娘になつて師を囲み
姑の小遣いもある新予算
妻も子も仕事も忘れ飲まんかな
老婆は歸も忘れて一寸妬き
忘れていたのに坊やねだりだし
友も懐く私一人が忘れられ
犯人も故郷の山野忘れかね
卒業名簿持つて保険すすめに來
卒業日待てず求人おしかける
卒業入業赤字何のその
卒業式答辭の声にに残り泣き
スカートのひざに名残る寝押しする
末つ子も卒業ババのしわも増え

万竿 琴路 史好 生坊 くり 一仙 ひとみ 照美 京風 京子 孝子 白扇

品質優良
先チカペン
TACHIKAWA PEN
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画鋏

大分市東区常盤町二丁目十一番地
立川ペン先株式会社



卒業式再会約す手の温さ
あくびしたくそを若いパパ
それはもう卒業したと妬いていず
その女はくろの外は忘れ去る
人生に卒業はなし老眼鏡

あすなる川柳会

山本素郎 報

茶室の合戦もありキールダー
里がえり鍵は牛乳受けの奥
妹の脈もみてみるブレゼント
悩むこと立ち入りすぎて嫌らわ
もう掏るか掏るかと刑事ホシを
助かつてから笑い話になるスリル

南海川柳会

(大阪市) 辻

圭水報

八郎
宏子

雅号ぶつちやけばなし

・はっほ・



・まるかわ・

・丸川初甫・

(16)

昭和二十二年八月、北川春男先生
に初めて川柳を教えて頂き、不取敢
いけばなしの雅号を横取りして初甫とつけた。翌月何
か川柳の方の雅号を先生にお願いした所、春男先
生の春を頭につけて「春甫」はどうか。このよい雅
号を頂きながら又しても初甫と書き、春甫と書き直
したり、二つ雅号の共用が暫く続いていたが、いつ
の間にかやたらとうとう春甫を途中で、落して来て、先
生には誠に申し訳ないと思ひながら今日に及んで
いる。三十六年頃に花道北摂司所へ変つて、初祥と
つけられ、幸い初甫は川柳専用の雅号として愛用し
ている。

(元 国鉄職員 57歳)

幸子 梅里 白柳 薫風 好郎
伝統を捨て切る養子うらやまれ
伝統と云う名できびしすぎるむち
伝統の誇り一刀彫りに見せ
ワイロー社句会(ハワイ) 快夢起報
酔う程にエチケツトなぞ吹つ飛
旅行者の知つておきエチケツト
レディファストと覚エチケツト
バタ貝いことばつかるエチケツト
エチケツト女尊男卑が気に入ら
たしなめた不作法娘吐きすて
不行儀を叱れば時代と口ごたえ
洋行もレディファストだけ覚え
エチケツト青良は臆ばかり教え
アベツクヘボリスは大廻りを通り
エチケツト駄洒落も出せずかと

貴山 圭水 霞乃
睡舟 崎坊 峯園 慶花麗 快夢起 雪女 三石 泉水 万里歩 淫菓子

親しき仲にも欲しいエチケツト
エチケツト知らぬステテコに
エチケツト女に甘い民主主義
人格を無言で語るエチケツト
エチケツト氣にして料理の味忘れ
エチケツトしびれを切る茶の会
どんぐり川柳会(羽曳野市)川村好郎報

せめてものどろきに買つビタミン
病み長し新薬と聞けばのみたがり
飲んでは効能書を読んで居り
週刊誌捨てるために恋を捨て
週刊誌買つて立読み遠慮せず
週刊誌五〇円は安い飼育法
当り屋は無傷薬代ゆすぶられ
長病の薬の名前も知りつくし
忘れずにビタミンのんで子便

エス子 北海 柳山 浅太 紅溪 功雄 直己 白屈 鬼造 石秋 生良 万里 一平 マサエ

薬屋に近く効かぬかいてみる
ニキビ取る薬が氣になるお年頃
有難や飲む避妊薬登場す
しくじりもたまには薬と力づけ
機中では薬一服日本晴
苦しさは麻薬を求めるふきだまり
故郷の母せんじ薬でよく治り
オフイスの話題にのぼる週刊誌
週刊誌スキャンダルが詰合せ
週刊誌読むふりして彼を待
結婚も離婚もさせる週刊誌
癒える日が近くおしやれを
約束におしやれの時間たしてゆき

昭文 若舟 静代 馬翔 重夫 一茶 石秋 雪貞 於干 努平

美粧院やつと妻にも週刊誌

かがみ川柳會 (岡山県) 池田古心報

好郎

帰らない仔犬と同じ犬の声

きさ子

晴窓川柳會 (愛媛療養所) 関本柳剛報

万寿子

浮気まだ出来るとドツクから帰る

美房

ドツクには縁なく姑よく動く

青米

娘の盛り化粧をすれば人目引く

老骨

尻馬に乗つて人から嫌がられ

憲坊

ドツクを見んやバレーの囁も

吉太郎

口車に乗つてしやべつた後を悔い

碧人

喝采は確かに聞いて馬の脚

喜美恵

欲求不満ドツク入りはしたけれど

八郎

落とされてやつと気のつく口車

雅子

カメラン枯れ木に裸女を踊ら

のぼる

人間ドツク浮気よりましと妻

柳太郎

乗せられてみんしやべつた口車

清水

捨てるべき時には捨てた意地を

松波

その意地が故郷へ錦飾らせる

好郎

口車蛙の面には逆らわず

古心

何時なりと散る気椿のいい度胸

喜代香

母ちゃんにもらつた時計とまら

久子

姑の後から夫の口車

たつよ

馬の耳に風上昇の物価高

柳剛

新学期先生はじめはこわく見え

清子

月並の句会にやつと間に合せ

稲平

観光馬鼻を並べてお茶をひき

俊馬

留守番をねずみに頼み町に行く

日出夫

月末で現場はいまだ灯を消さず

史山

主役への夢を捨てまい馬の脚

勝生

初登校セーラの帯もキユツと締め

浩美

巻尺が伸び人垣の輪を消さず

晴浪

意地無しと世間の声を背に受けて

弥子

ライバルを異性に決まハツスルし

悦子

手術室の現場しずかに刻さざむ

蛙浪

男の子意地を外科医にほめられる

友吉

どうしてと彼女の前に落ちてけず

延子

野次馬の方が騒いでいる現場

文女

偉な奥さん 実 は 丙 午

千寿子

お祈りをする子天使のように見え

敏夫

月並の赤字へ同じ愚痴ばかり

秋月

枯れ草に臥して大地の息吹き臭ぐ

南牛史

姉ちゃんが嫁いだ後の暗い日々

笑子

事故現場かさねこわれたままお

美佐子

富柳會 (富田林市) 阿部柳太報

五峰

以上小・中・高校生

岸和田川柳會

高橋操子報

今まではお釣があつたのが足らず

重子

春眠をむさぼる気まま日曜日

無門

だまされたような氣もしたな役

たけし

値上りに母のへそくりおいつかず

半月

夫より姑が好きなのを着る

扇水

代筆の方も悪筆詫びて書き

起人

新聞の隅で値上げがかしこまり

六竜子

転動でやつと落着く宵の酒

松風

忙しさが賀状の伸とする疎遠

浪速子

歳費の値上げ反対しても上るのさ

摩天郎

倅せの掌が上空に隠せない

和尾

しまい風呂自分ののどに一寸惚れ

園子

肉が呼ぶかぬふもジャンプ

美代

どんな柄着でたか女知つており

操子

間借りして小声で話す癖がつき

瓢人

値下りへタ刊だけと上う暮し

柳太

毛の抜けたブラシが明日を信じ

文平

春を待つ新芽がじつと霜に耐え

白光子

値下りな字でうどんなの値が上つてた

柳太

値切つてもデパートくすくす笑う

清雨

霜焼けの足むずむずと足袋を脱ぐ

かつら

雪凍る夜道手を借し手を借られ

花梢

愛の日々実篤の詩に励まされ

静居

大寒の霜が祖父の背丸めさせ

忠士

水道が凍つた位で呼び起し

吸江

せつかくの化粧にきびが悲しませ

そのみ

血圧を気にして霜の朝をねる

操子

ドツク入り聞かき自分の老を知り

紅月

叱られて寝つかれません春の宵
 ユーモア一解せぬ女冬に似る
 西東戸感い旅で笑い合ひ
 風あらた胸に不動の愛生ず
 他愛ない寝言ふとんをかけてやり
 割切つた二人の仲を理解する
 どちらかと言えば素顔の君が好き
 物足りぬ顔で日帰りのバスに揺れ
 味附汁はやつぱり家の味でよし
 君に似た雲少しづつ笑つて来
 水面にぼちやつと一輪紅椿
 ほろ酔の頬に程よい春の風
 長生を祈りますよと手の便り
 夕焼の空を支えている巨木
 日曜の雨はパジャマのままで済み
 好物へまたして旅の子を濟う
 就職をさせて子供でないと知る

明朗川柳会

(大阪市)

田中多幸報

俊健 政己 澄恵 こうじ 正威 雅幸 蘭枝 一路 憲次 茶女 不動 凡女 不火 静子 房火 静子 多幸 芳生 清江 源江 久子 久子 喜久 濁子 繁子

開発の前の姿の野よ山よ
 うれしかつた配給時代のにぎり
 おのろけの思い出話に力入れ
 思い出す一日の米二度に買い
 思い出すたび腹が立ち腹が立ち
 思い出の数白髪の数に有り
 思い出のアルバム見れば若がえり
 オースケイ川柳会(大阪市)大坂形水報
 手洗いに急いでぬける商店街
 商店街の製品目についた
 商店街財布ばかりが気にかかり
 心斉橋肩で人切る日曜日
 繁華街トッパモードに目がつり
 商店街キヨロキヨロとして進め
 商店街を待ちつかれてる色男
 百万都市隣は隣知らん顔
 街灯をさけてアベック腰をかけ
 街路樹の陰で違反を見張るだけ
 父さんとミナミのネオン見て歩き
 街路樹も排気ガスで息が切れそう
 飲み屋街行く度変わる経営者
 大星人スモッグの街見下ろせず
 街に出てまだ行先を決めかねる
 名店街一軒違ふもの列べ
 足袋の裏すく黒くなる街に住み
 夕刊を売る街角に風を知る
 寝たところをたたき起したらしい顔
 夢をたたけは違つた顔がふり返り
 夢に見た顔思い出の有つた顔
 名人の打ちこむ顔のすばらしさ
 昼とも出来るニキビに腹が立ち
 昼と夜こうも変わるか夜の蝶

弘士 富坊 茶々 生坊 忠明 一休 雄元 識元 豊弘 重三 順美 正典 貞彦 智也 義一 健郎 重成 有郎 常一 形夢 白柳 大山人 美大勝 東勝 広助

宴会・折詰・出張パーティ

大萬

町崎松区野倍阿
 TEL 5031・5032
 南区豊屋町三ツ寺センター
 TEL 9184

いられて心にもない笑い顔
 今は亡き母の面影娘に求め
 言いわけの用意も妻の顔に負け
 あの人とも凡人腹と顔に出し
 美理容新聞川柳クラブ(大阪市)

博人 真一 仙夢 南柳 喜正 喜平 良治 秀雄 南柳 柳一 柳心 柳坊 柳助 喜代 喜仙 白柳

・九 輪 水 煙・

四月二十六日に実弟が入院、三十日には危とく、五月一日には死亡、二日が告別式、それがすむと自動車で家族四人で福岡へと目のまわる多忙さだった。そんなわけで編集部へもロクに顔も出さずすまないと思っている。毎月五、六日ごろには印刷所へ原稿を入れるのだが「作句教室」と「大萬川柳」の選句は私の責任なので気が気でなかった。

・ 2 D K ・

いよいよ来月は「路郎忌川柳大会」で、本社としては、はじめての川柳大会なので皆さんにご協力をぜひお願いしたい。(清水白柳)

★ありがたいことに創刊号からずっと送本日は晴天だった。自動車で郵便局へはこぶのだが積みおろしに雨だったらせっかくの雑誌が

ぬれてしまうので、本が出来る前日には天気予報を送できくことにしている。一と月のうちで天気予報を気にするのはこの一日だけである。しかし今月はウツドキだ。なんとか発送日だけはいい天気になってほしい。

★雨といえは、春雨(はる

疲れに!

アリナミンFにB6・B12を配合

アリナミンA

神経痛・便秘・心臓病にも

タケダ



(さめ) 五月雨(さみだれ) 時雨(しぐれ) それに梅雨(つゆ)と、雨という字も

本 社 六 月 句 会

日時 六月六日(月)午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話 211・1478番)

兼題 柳話
「マイ・ベース」
「先取り」
「架線空」

松若 橋高 若本
江柳 島鉄 薰多
梅潮 花風 久志
里児 久志
選選選選選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪(271) 3985番

8月の「手がり」「パンチ」
兼題「歴史」「滝」

★夏乃先生は、佳句をよっている。

★次号に「路郎百句」を特集することにした。さいわい夏乃先生が、その百句をえらんでくださるので、きつとよるこんでいただけるものをお届けできと思っ

★夏乃先生は、佳句をよっている。★次号に「路郎百句」を特集することにした。さいわい夏乃先生が、その百句をえらんでくださるので、きつとよるこんでいただけるものをお届けできと思っ

川 柳 塔 社 主 催

路 郎 忌 川 柳 大 会

日 時 昭 和 41 年 7 月 10 日 (日) 午 前 10 時 開 催

会 場 慶 沢 園 (旧 住 友 別 邸)

大 阪 市 天 王 寺 公 園 内 美 術 館 横

電 話 大 阪 115-0 7 7 1 番 (公 園 事 務 所 内)

★ 梅田駅から環状線や地下鉄でお越しの方は

天王寺駅下車・会場はすぐわかります。目標は美術館。

会 費 3 0 0 円 (記 念 品 贈 呈)

★ 才一部「一周年祭典」

(午前10時)

― 休 憩 ― (30分)

★ 才二部「川柳大会」

(正午・3時)

挨拶

麻生アト

同

中島生々庵

追憶談

堀口塊人他

兼題

「一徹」 近江砂人

「天井」 梶元紋太

「雲」 川上三太郎

「髭」 麻生葦乃

(兼題締切・六月二十日本社着便まで)

席題

(四題・当日12時30分締切厳守)

(兼・席題とも二句以内)

★ 投句だけされる方は切手五十円封入

★ 才三部「野外パーティ」(模範店等)

― 同会場庭園において ―

会 費 八 百 円

投 句 先

大 阪 市 南 区 鰻 谷 仲 之 町 2 0

川 柳 塔 社 内 路 郎 忌 川 柳 大 会 係

戎橋
大阪

北極星

所業營業直



くまた明	野田阪神	野田阪神	永楽橋	大正橋	白鷺温泉	戎橋
ハンヤの食堂	ハンヤの食堂	やわらぎ	やわらぎ	やわらぎ	やわらぎ	北極星
(040 1275-7)	(040 1275-7)	(040 1275-7)	(040 1275-7)	(040 1275-7)	(040 1275-7)	(611)
						一七五 一七六 一七七

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚饅 蓬萊 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十一年五月二十五日 印刷
昭和四十一年六月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 六月号

定価 百二十円 (送料六円)